

加曾利EⅢ・Ⅳ式土器の系統分析

— 配列・編年の前提作業として —

加 納 実

目次

はじめに

- | | |
|----------------|------------------|
| I 変遷観の確認 | IV 個体別の系統分析 |
| II 意匠充填系土器群 | V 系統分析からみた土器群の展開 |
| 1 型式学的素描 | 1 意匠充填系土器群 |
| 2 成立論（予察） | 2 横位連携弧線文土器群 |
| III 横位連携弧線文土器群 | 3 加曾利EⅣ式土器の主要類型 |
| 1 型式学的素描 | おわりに |
| 2 成立論（予察） | |

はじめに

加曾利E式土器後半期の研究が停滞している要因は、研究史の解釈に起因する呼称方法の混乱状況と、土器群の系統関係の錯綜する様相を把握し得ていない現状に求められよう。

例えば、『日本の考古学』で示された所謂吉井城山編年に準拠した場合、特徴的な波状沈線文土器群の成立をもって加曾利EⅢ式土器の成立とするならば、その成立に前後するキャリパー形土器群を如何なる型式学的画期を以て加曾利EⅡ式期とEⅢ式期に弁別するのかという命題や、波状沈線文土器群自体の成立過程の解明も、未だ共通の理解を形成するには至っていない。また、梶山タイプと呼称される土器群の成立過程の認識も、研究者間での差異が払拭されているわけではないし、波状沈線文土器群や梶山タイプの展開についても同様であろう。目を転じて、加曾利EⅣ式土器に注目するならば、まず第一にEⅣ式土器自体の規定性が問われなければならないし、概ねEⅣ式土器に相当すると思われる土器群（第21図）の成立過程も不鮮明なままである。また、胴上半部で沈文（沈線文）による渦巻文系意匠が卓越する土器群や、浮文（隆帯）による球状意匠の卓越する土器群についても、EⅣ式土器自体の規定性のなかで、その位置づけが明確に為されなければならない。

このような状況を鳥瞰したときに、研究の前提作業として為すべきことは、土器群の類型的な把握であり、その第一歩として土器群の系統的出自を明らかにすることが必要であろう。よって本稿では、主に千葉県内出土の当該期土器群を分析対象の中心に据え、土器群の文様構成法

に着目し系統的出自からみた分類を行い、個々の土器に評価を与え今後の編年作業へと繋げてゆきたい（註1）。尚、図版作成においては、千葉県内の主要土器群の網羅にも努めたつもりであり、集成的意味あいも込めており、その方面での活用の便宜にも供したつもりである。

I 変遷観の確認

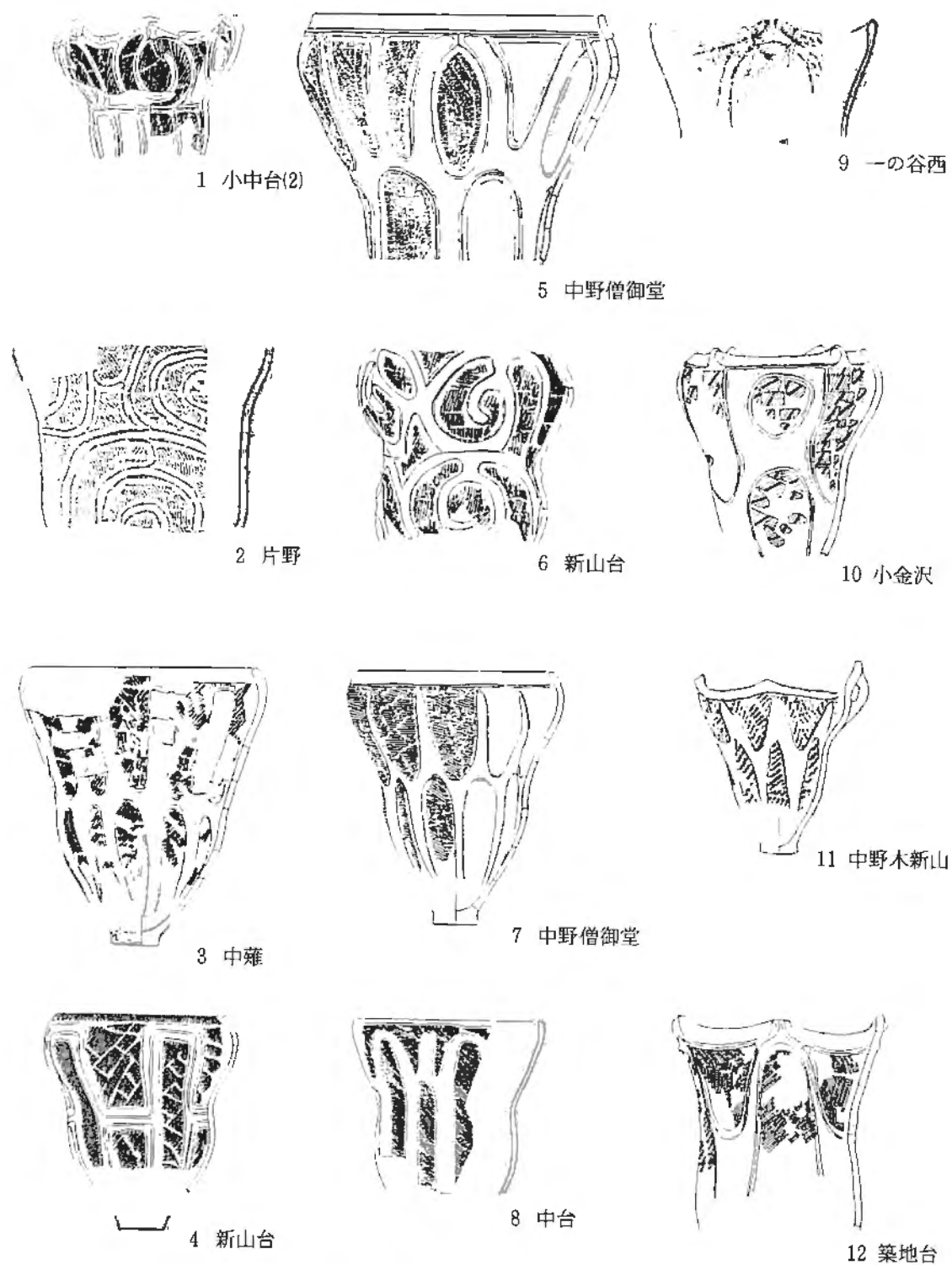
加曾利EⅢ・Ⅳ土器の系統的な分析と、その分析から認識される各類型毎の配列作業を行う前に、編年観の大枠を提示しておかなければならない。嘗て筆者は、千葉県内の当該期土器群の分類と変遷方向の提示を行い、更に一括資料での検証から、加曾利EⅢ式土器を古段階と新段階に分離し、あわせて加曾利EⅣ式土器の規定性について私案を提示している（加納1989以下旧稿と略す）。本稿においても、基本的に当時の認識に準拠するものであり、改めてその編年観の大枠を提示しておきたいと思う。尚、詳細については旧稿に目を通して頂きたい（註2）。

第1図1・2は浮文系渦巻文土器と呼称したもの（加曾利EⅢ式土器古段階）で、これらは5・6の如く、無文部の拡大・渦巻文意匠の球状意匠への簡略化を窺い得るもの（EⅢ式土器新段階）に変遷すると捉えた。これら球状意匠を有する土器については、9のように無文部が口唇部へ抜けたり、10のように弧線文自体が直に立ち上がるような土器へと変遷する例があり、これら、副文様である弧線文が独立した意匠として単位文化した土器群をEⅣ式土器として捉えた。

3は横位連携弧線文土器（註3）と称したもの（EⅢ式土器古段階）であり、このような横位の連携が強固なものから、弧線文の波頂部が鋭利になり、口縁下横位一次区画文（稲田1972）に密接し、横位の連携効果が低下するもの（7・EⅢ式土器新段階）へと変遷する。このような土器群は11のように弧線文が完全に口縁下横位一次区画文に独立して付着し、横位の連携効果を失うこととなり、当該土器群をEⅣ式土器として捉えた。

4は横位連携弧線文土器に含まれる弧線文と懸垂文が入り組む土器群で（EⅢ式土器古段階）、8の如く無文部が拡大したものへと変遷し（EⅢ式土器新段階）、12のように無文部が口唇部へ抜け、弧線文が独立した意匠として単位文化したものを、9同様EⅣ式土器として捉えた。

このように、加曾利EⅢ式土器（古段階）の文様構成法に着目し、無文部の拡大・横位連携効果の低下が認められるものを、概ね加曾利EⅢ式土器（新段階）として捉え、弧線文の単位文化を以て加曾利EⅣ式土器として捉えた。更に、これら文様構成法の変化に連動するような意匠描出技法の変化についても概略を述べておいた。それは、横位連携弧線文土器にみとれる弧線文の単位文化が、EⅢ式土器での“沈線+沈線の丁寧なナゾリ”というものから、“器面の硬化段階でのナゾリの顕著でない半肉彫状の細い沈線”に変化し、細く直線的な意匠の描出を余儀なくされ、意匠の単位文化を促すという指摘である。敢えてここでこの意匠描出技法の変化について繰り返しとりあげたのは、当該期土器群の系統分析と配列を試みたものの、未



第1図 加曾利E式土器後半の変遷（概観）1～4EⅢ式（古段階）／5～8同（新段階）／9～12EⅣ式

だ加曾利EⅢ／IV式土器の弁別を為し得ない土器群が存在し、当該土器群については、この意匠描出技法に着目したところでの弁別が比較的有効であり、浮文系の土器群についても、旧稿で示した隆帯の断面形態やナゾリの手法の差異がやはり有効である。同様に旧稿で述べた器形の変遷についても有効性が確認できるようである。

以上が、旧稿における骨子であるが、概ねこの編年観に沿うかたちで論を進めることとするが、各土器群の系統的な差異に基づく呼称方法について提示しておきたい。詳細については後述するが、1・2については“意匠充填系土器”と呼称し、3・4については共に横位連携弧線文土器であるが、両者を区別するため、3については弧線文と懸垂文が入り組むことなく向かい合うことから“対向系横位連携弧線文土器”と呼称し、4については“入組系横位連携弧線文土器”と呼称することとしたい。尚、この呼称方法は論を展開するに際しての便宜的な呼称方法であり、研究史的立場や土器群の系統性の詳細な確認から、より適当な呼称方法があれば、全面的に従う立場にあることを明記しておきたい。

Ⅱ 意匠充填系土器群

1、型式学的素描

意匠充填系土器（第4図）とは、従来より「梶山タイプ」と呼称されてきた土器群であり、石坂茂氏等の謂う「胴部隆帯文土器」（石坂他1989）や、筆者がかつて「浮紋系渦巻紋土器」と呼称したものにも相当し、器形・文様帯構成・意匠レベルでの差異を越え、意匠充填手法を採る土器群を総称することとしたい。

意匠充填系土器群の型式学的な規定（概念）に就いては旧稿中に於いても簡単に触れているが、ここで改めて明確にしておきたいと思う。

意匠充填系土器とは、読んで字の如く、主として隆帯で、器面に個別の意匠（パネル状に縄文部をふちどる意匠・文様）を充填してゆく（はめ込んでゆく）もので、イメージとしては、巻のジグソーパズルの完成へ向けての工程を彷彿させる。具体例としては第2図7のように、胴部上半に主文様である渦巻文を描出し、渦巻文間を逆三角形風の意匠（副文様として捉え得る）や、中央部が幅狭に歪む縦長の長方形風の意匠（これもまた副文様として捉え得る）で充填するもので、胴部下半も、末端を解放しているものの、懸垂文風の方形の意匠を、上端を渦巻文に沿わせながら充填している。

しかし、厳密に謂うならば、主文様間に副文様を充填するのではなく、主文様の描出により二次的に生成した主文様間の空隙部を、我々が副文様として認識しているに過ぎない。

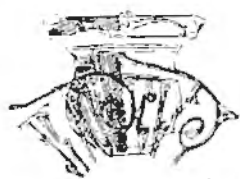
意匠充填系土器群の意匠描出技法・意匠描出効果の注目すべき性格として、磨消縄文手法に関わる相反する2つの性格の内包を挙げておかなければならない。これは意匠充填系土器は、
個別のパネル状の意匠を器面に空隙なきように充填してゆく手法を採るために、意匠描出効果

として、図（縄文）／地（無文）の対照効果に極めて乏しい点である。しかしながら、意匠を描出する隆帯と隆帯両脇のナゾリ部には決して縄文が施されることはなく、幅狭の無文部を確実に有しているとも言えよう。この相反する性格の内包は、後述する他系統の土器群への影響を読みとる際に困難をきたすこととなる。しかしながら意匠充填系土器そのものの展開に際しては、幅狭の無文部の存在が優先されている。具体的には、意匠充填系土器成立段階の意匠描出技法は、一義的には1本の隆帯（単浮線）で為されているが、充填されている個々の意匠そのものの縁取りは、隆帯ではなく隆帯両脇のナゾリによって為されており、隣接する2つの意匠描出に関わる隆帯は1本である。しかし加曽利Ⅱ式土器の意匠描出技法の基本的性格である磨消縄文技法のもと、“図／地”効果を獲得してゆく過程（個別の意匠間に無文部を設ける）のなかで、隆帯両脇のナゾリを幅広に獲得するのではなく、個別の意匠毎に“隆帯＋両脇のナゾリ”の描出技法を獲得し、結果として2本隆帯（複浮線 第4図3）が出現することとなる。この結果、意匠充填系土器は本来有していた相反する性格のひとつである貧弱な“図／地”効果を払拭し、磨消縄文技法（卓越した“図／地”効果）を優先的に消化し、“図”である縄文部の意匠の単位文化を獲得してゆくこととなる（註4）。

2、成立論（予察）

丹羽茂氏が概ね大木8b式土器として捉えた（丹羽1981）山形県古道遺跡例（第2図1・2）を瞥見すると、地文である縄文を施文した後に、隆帯そのものが渦巻文を描出している。また渦巻意匠部は単位文として独立して描出されることなく、懸垂文の効果を有する隆帯に癒着（依存）する傾向が強い。意匠充填系土器の成立の理解は、この大木8b式土器の渦巻文の変化に視準的である。つまり地文施文後、隆帯そのもので表現（描出）していた渦巻文が、縄文部の輪郭線として獲得され、意匠を縁どることとなる。つまり大木8b系土器の渦巻文そのものをポジと捉えるならば、地文縄文（ネガ）は当然、渦巻文を取り囲むような大柄のJ字風の意匠を醸し出すこととなり、ネガティブな渦巻文が、視覚的に優先されることとなる。このような大木8b式土器の描線の役割（機能）の変化をもって、意匠充填系土器の成立として理解することが妥当であろうと思われる。この動きと連動するように従来の“地文縄文→隆帯”という施文順序が“隆帯→意匠内へ縄文充填”という施文順序へ移行するようになる。これもまた縄文部の意匠（図形）を強く意識した所似であろう。但しこの施文順序の変化は大局的な傾向であって、この特徴のみを以て、時間的傾斜を優先的に読みとることは困難である。

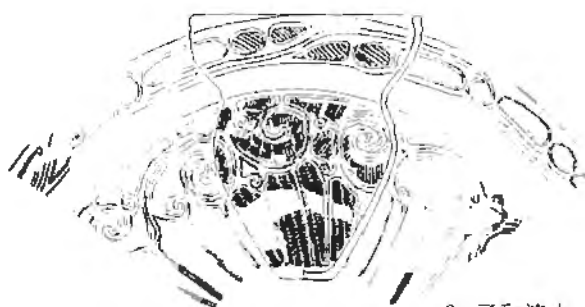
意匠充填手法は大木8b式土器からの変容によって概ね説明し得るが、意匠充填手法を即大木9式土器成立の特徴として捉え得るか否かに就いて、つまり、意匠充填手法の成立が、大木8b式土器の関東地方的な変容であるのか、東北地方とも連動する大木8b式土器の広域的な変容であるのか、未だに確固たる結論を出し得ない状況にある。大木9式土器の中位の部分や新しい部分に認められる単位文化の進行の著しい土器群は、意匠充填手法を採る段階の想定無



1 中道 (山形)



2 中道



3 子和清水



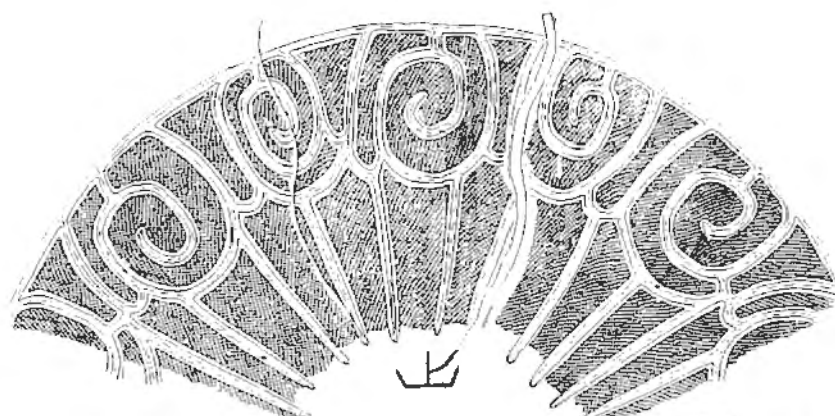
4 草刈



5 小池麻生



6 草刈



7 花影 (埼玉)

第2図 意匠充填手法の成立

くしてはその成立を語り得ないという予測から、広域の変容過程から意匠充填手法が成立している可能性が強いといえよう。しかし、現段階での資料的制約からは、意匠充填手法の成立は大木8b式土器の関東地方的な変容であると言わざるを得ないようである。

意匠充填系土器の文様帯構成に注目すると、第2図5・6 第4図7～9に示した“口縁部文様帯+頸部無文帯+胴部文様帯”という構成を採るものと、第4図1～6に示した“口縁端部無文帯+胴部文様帯”という構成を採る（梶山タイプ）2者を鳥瞰することができよう。

前者に関しては、意匠充填手法萌芽段階の土器群（第2図3・4）に、胴部が張るという、大木8b式土器との共通性を有しており、意匠充填手法成立段階の土器群（第2図5・6）については、加曽利EⅡ式土器のキャリパー形土器からの影響から、胴部の張りが消出する趨勢をみてとることができ、大木8b式土器と意匠充填系土器の強い系統的類縁性を認めることができよう（註5）。

後者（梶山タイプ）の“口縁端部無文帯+胴部文様帯構成”を採る土器群に関しては、“内屈する胴上半部断面形態”と、全体としての下半がすばまる“瓢形の器形”、そして“胴部のくびれ部を境に施文域が分割される”という特徴を認識することができよう。ここで注目すべきは、この諸特徴を大木8b式土器のなかに普遍的に認め得ない点と、この瓢形意匠充填系土器とも呼ぶべき土器群（梶山タイプ）には、意匠充填手法萌芽段階の様相を示す個体例が未だ検出されず、ほぼ意匠充填手法成立段階の整然とした土器群のみで構成される点である。このことは、この瓢形意匠充填系土器とも呼ぶべき土器群の成立が、関東地方内部で為されている様相を暗示しているとも理解できよう。つまり、大木8b式土器の南漸と関東地方的要素の融合からの生成を前提に分析せざるを得ないことを示していよう。

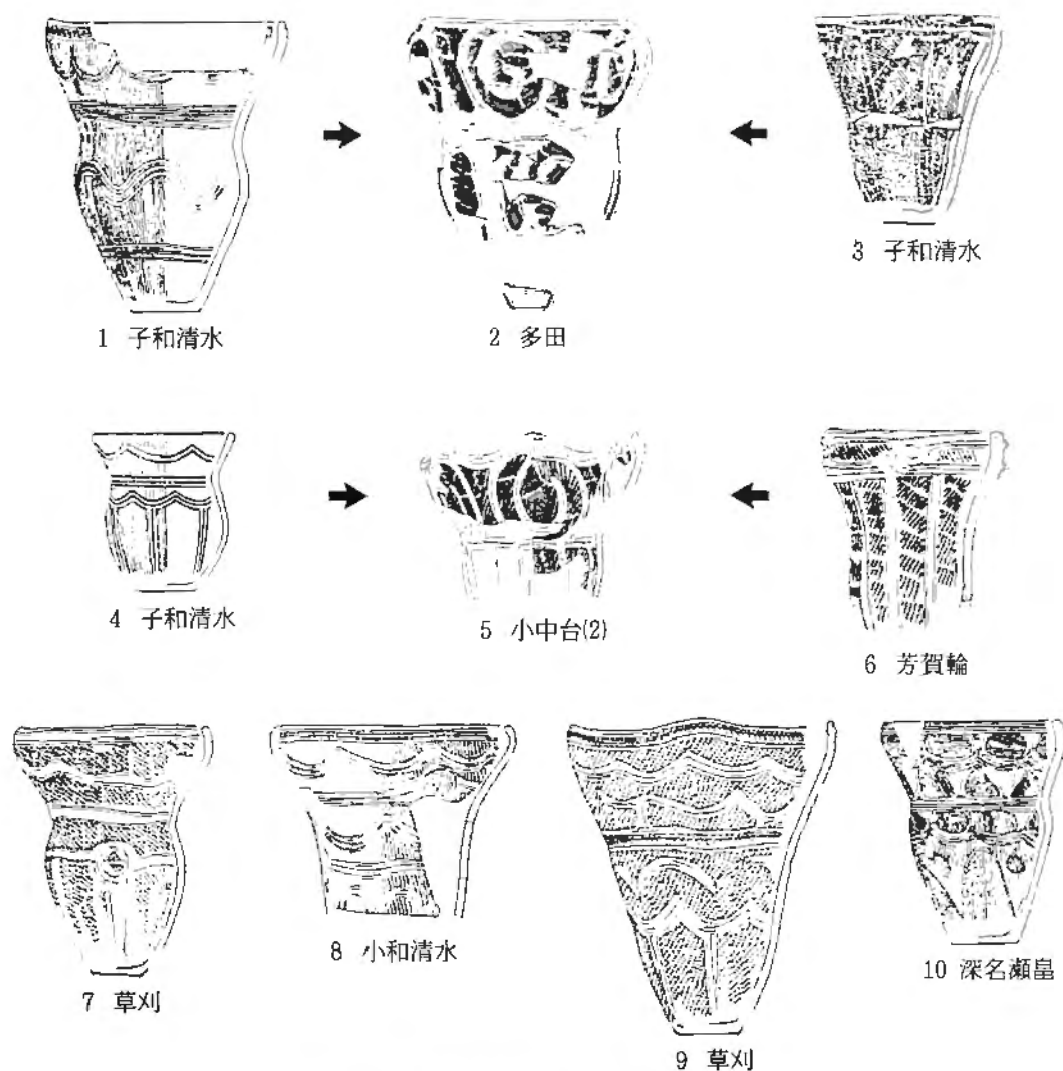
ここで、瓢形意匠充填系土器（梶山タイプ）と加曽利EⅡ式期の土器群を対照した場合、幾つかの相同な規制をみてとることができる（第3図）。

- * 主文様と副文様の規則的な交互配置（第3図2・5・6）
- * 器形に制約された施文域の分割（1・2・4・5）
- * 両施文域への相同の意匠配置（意匠の多段・重畳構成）（1・2・3）
- * 上半施文域での主・副文様構成+下半施文域での懸垂文構成（5・6）
- * 湾曲・外反する上半施文域の断面形態（1・2・4・5）

このように、個別の意匠や意匠描出技法の差異をひとまず払拭したところで、両者には、器形や文様構成法に相同の規制を認め得ることから、瓢形意匠充填系土器（梶山タイプ）の成立は、加曽利EⅡ式期の土器群（キャリパー形土器・連弧文土器・連弧文系土器）の規制上に意匠充填手法を採る意匠が転写されたものと理解し得よう。このような転写の実例としては先述の註5に示したような、キャリパー形土器の胴部に横位連携弧線文や、可能性として意匠充填手法を採る意匠が転写されている例や、キャリパー形土器の口縁部に意匠充填手法を採る意匠

が転写された例を挙げることができよう。更に、転写の実例ではないが、意匠充填系土器群と連弧文土器群の接触例として、第3図7～10を挙げることができよう。7は胴下半部の懸垂文間に円形の意匠を充填し、8はくびれ部の横位一次区画文中にやはり円形の意匠を充填している。9は口縁部下半の弧線文に弧線文に沿うように閉じたパネル状の意匠が充填されている。また胴下半の弧線文に沿うように縄文地の懸垂文が充填されている。10は弧線文の上下に円形・三角形の意匠を豊富に充填している。

以上のように、瓢形意匠充填系土器（梶山タイプ）の成立は、大木8b式土器の南漸と関東的変容である意匠充填手法の獲得、更に、在地的土器群の施文域への転写という過程から説明し得よう(註6)。



第3図 意匠充填系土器群と連弧文土器



1 長田雉子ヶ原



2 龍角寺



3 片野



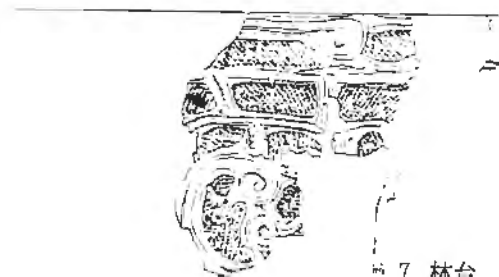
4 団護台



5 多田



6 中殖



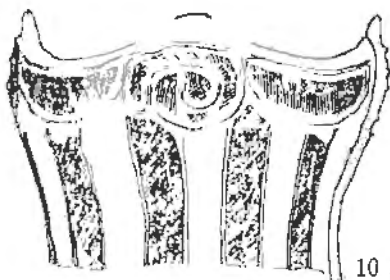
7 林台



8 後貝塚



9 曾谷1丁目



10 小池麻生



11 神田山2

第4図 意匠充填系土器群

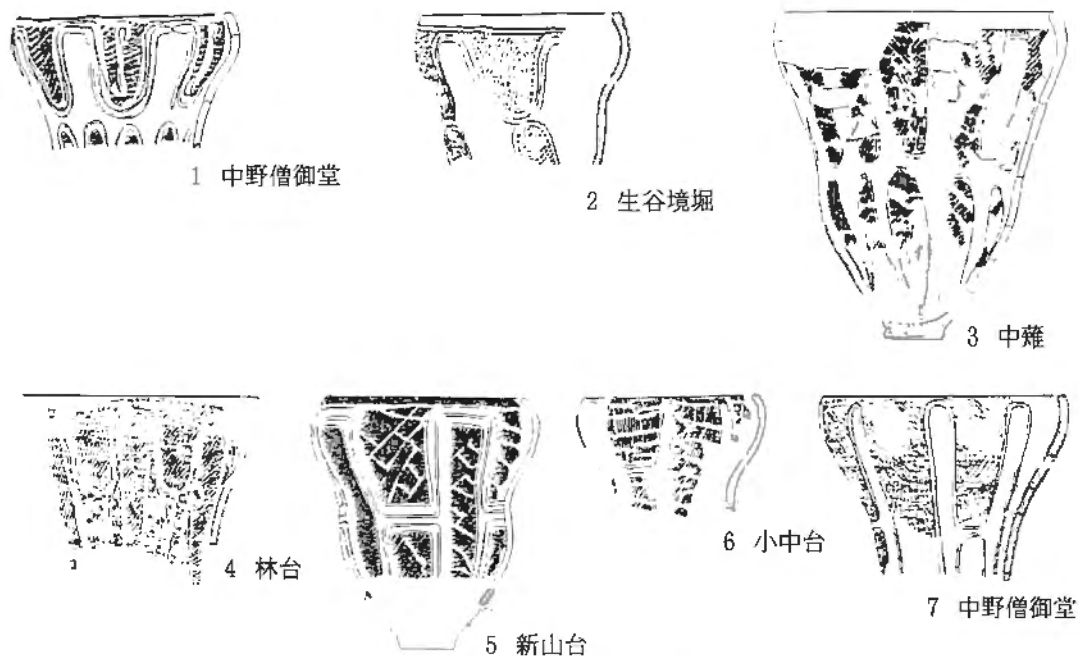
Ⅲ 横位連携弧線文土器群

1、型式学的素描

横位連携弧線文土器とは、吉井城山第一貝塚（岡本1963）第3群土器B類の一部・同C類の一部や、埼玉編年（青木他1982）のⅧ期土器の2群に概ね相当するものであり、読んで字の如く、上半施文域に横位に連携した弧線文を有する土器群であり、下半施文域には縄文部に強い懸垂文効果を有し、沈線による意匠描出を原則とする。

横位連携弧線文土器の型式学的規定は、表裏一体として、連弧文土器との型式学的差異を示すことになる。

加曾利EⅡ式期後半の連弧文土器（第3図1・4）は、口縁部に縄文地に集合沈線（2～3本）による弧線文（比高差の乏しい波状の意匠）を横位に連携するように配し、集合沈線内が磨り消されるとはいえ、基本的には“図／地”の効果に乏しく、あくまで弧線意匠は集合沈線そのものである。これに比べ横位連携弧線文土器（第5図1～5）は、概ね単沈線により弧線文（胴上半部を懸垂するが如く比高差のある意匠）を描出し、口縁端部もしくは口縁直下の横位一次区画文と弧線文間のみ縄文を施し、明瞭な“図／地”効果を有し、弧線意匠は単沈線であると同時に、縄文部により描出されることとなる。また、連弧文土器には、胴部意匠が口縁部と相同の意匠が配される（意匠の多段・重畳構成）ものと、無文部に強い懸垂文効果を有する懸垂文が施されるものの2者を明瞭に認めることができるが、横位連携弧線文土器の胴下



第5図 横位連携弧線文土器群

半部は、縄文部に強い懸垂文効果を有する懸垂文が施されることが一般的である(註7)。更に、連弧文土器と横位連携弧線文土器の型式学的な決定的差異として、施文域の分割方法と、施文域と意匠の関係を指摘することができる。連弧文土器では口縁部と胴部の施文域が横位一次区画文によって明瞭に区分されるものが主であるが、横位連携弧線文土器では、器形のくびれ部(個体の形態)によってのみ分割される。また連弧文土器では施文域間に明瞭な横位一次区画文を有しているため、各施文域の意匠は各施文域内に納まっているが、横位連携弧線文土器では、上半施文域の弧線文間に下半施文域の懸垂文が入り組むように施される類型(入組系横位連携弧線文土器)が存在する。

このように、横位連携弧線文土器は独自の型式学的規定を有しているとはいえ、その規定が悉く連弧文土器との対照のなかから導き出し得るという性格を有しており、これはとりもなおさず、その成立に連弧文土器が大きく関与していることを暗示していると考えられる。

2、成立論(予察)

横位連携弧線文土器の成立については、文様構成法の差異から、対向系横位連携弧線文土器と入組系横位連携弧線文土器を同列に扱い得ないことから、ここでは別個の取り扱いをする。

対向系横位連携弧線文土器(第5図1～3)

当該土器群の生成に関しては旧稿中の認識に概ね準拠している。例えば、対向系横位連携弧線文土器には、キャリパー形土器や連弧文土器との相同の規制をみてとることができよう(第6図)。

- * 上半施文域での規則的な意匠配置(第6図1・2・3・4)
- * 器形に制約された施文域の分割(1・2・3)
- * 下半施文域での懸垂文構成(2・3・4)
- * 上半施文域での弧線文の横走(1・2・3)
- * 湾曲・外反する上半施文域の断面形態(1・2・3)

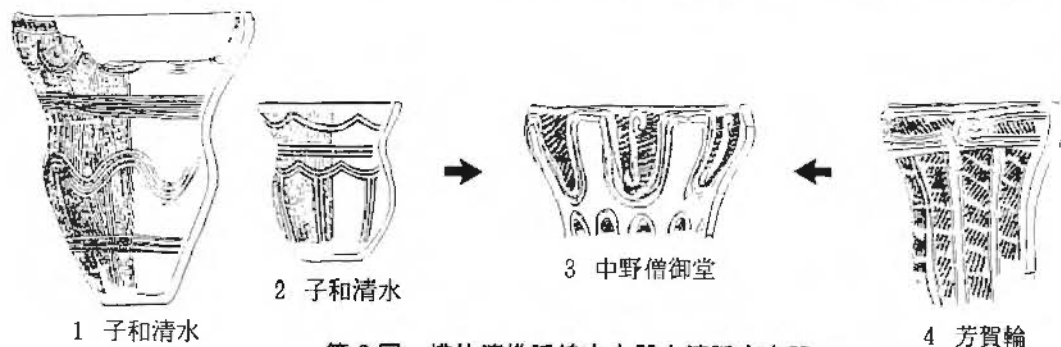
このように、個別の意匠や意匠描出技法の差異をひとまず払拭したところで、両者には、器形や文様構成法に相同の規制を認め得る。このことは、キャリパー形土器と連弧文土器の接触が対向系横位連携弧線文土器の成立に大きく関与していることを暗示していると捉え得る(註8)。また、連弧文土器の、重畳する弧線文(沈線)によって潜在的に描出されている縄文地の弧線文風意匠が、意匠充填系土器の成立に際して為される、縄文地部に潜在する意匠の明確な図形化(パネル化)の影響のもと、特徴的な上半施文域の意匠が生成してくるものと思われ、註7に記したように胴部の懸垂文構成の生成の経緯と共に、当該土器群生成における意匠充填系土器の基層的な影響を看取し得るところでもある。

入組系横位連携弧線文土器(第5図4・5)

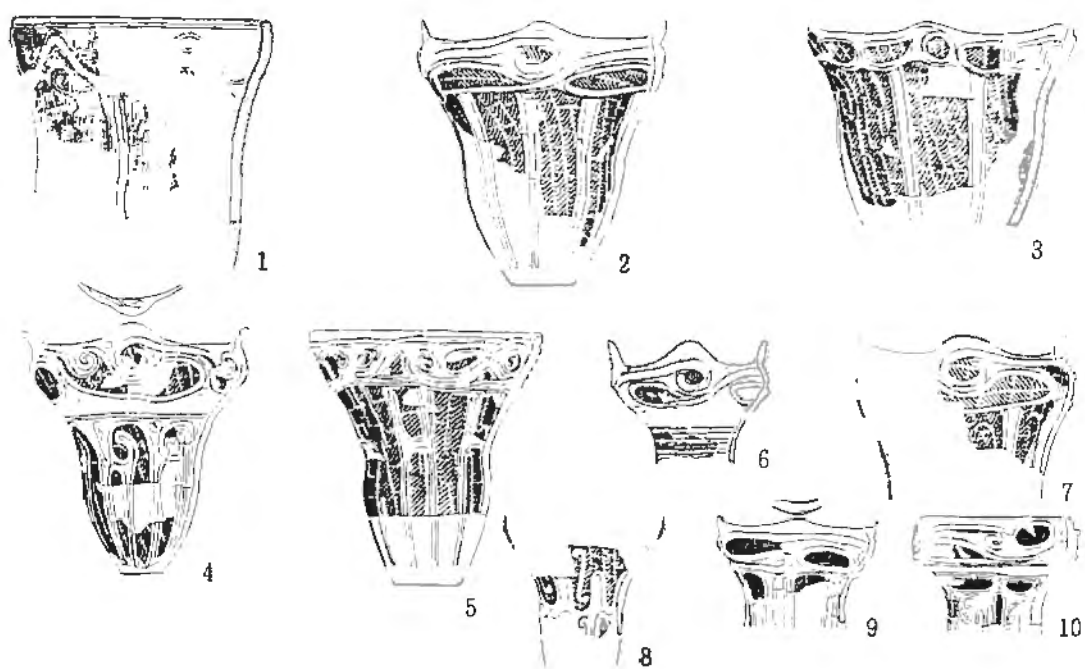
当該土器群の有する諸特徴のうち、形態的特徴や意匠(図形)の成立については、対向系横

位連携弧線文土器の成立の説明によって解決し得るが、ここで問題となるのは、横位に連携する弧線文間に懸垂文が入り組む特徴の生成過程であろう。先述の型式学的な規定（連弧文土器との差異）に照射させるならば、連弧文土器の施文域を分割する横位一次区画文の消失によって、入り組む構成が獲得されることも推察されるであろう。しかし、従来連弧文土器と呼ばれている土器群の終末期の一樣相として、第7図1・20のように、器形のくびれ部の横位一次区画文を有さない土器群が存在する。当然これらの土器群の生成過程も問われなければならないが、当該土器群の存在を前提にするならば、これらの土器群は既に、重畳する弧線文と弧線文に沿うような懸垂文構成を有しており、幅狭の無文部（弧線文・懸垂文）によって描出された地文の図形に着目するならば、既に入組系横位連携弧線文土器に特徴的な文様構成の萌芽的特徴が準備されていると捉え得る。これらの土器群を視座に据え、対向系横位連携弧線文土器同様の理解を適用するならば、重畳する弧線文（沈線）によって潜在的に描出されている地文部の弧線文風意匠が、意匠充填系土器の成立に際して為される、縄文地部に潜在する意匠の明確な図形化（パネル化）の影響のもと、特徴的な上半施文域の意匠が生成してくるものと思われる、註7に記したように胴部の懸垂文構成の生成の経緯と共に、当該土器群生成における意匠充填系土器群の基層的な影響を看取し得るところでもある。そしてこのような論理的過程を踏まえるならば、懸垂文の入り組む構成は、まさに、意匠充填系土器群の原則ともいえる、“器面に個別の意匠を空隙なきよう充填する”手法の影響と相俟って、弧線文間に懸垂文を充填させる（入り組ませる）文様構成法の完成が促進されると理解されよう。そしてこの、施文域（文様帯）と意匠（文様）の不一致という特徴は、まさに従来の加曾利E式土器前半期の伝統を払拭した加曾利E式土器後半期独自の大きな特徴であり、EⅢ式期（古段階）以降の土器群の構成に安定して加わることとなる。

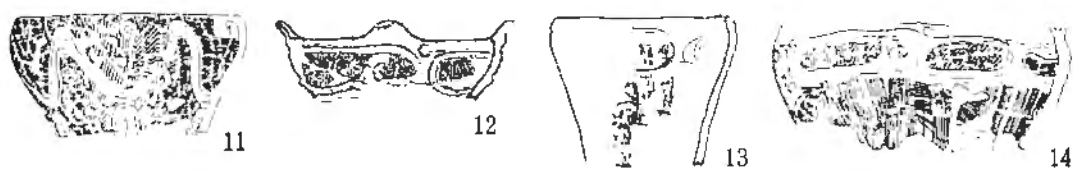
ここで問題となるのは、第7図1・11・15・18・20・21の取り扱いであろう。連弧文土器の規定性とも深く関わるであろうが、例えば11・15・18のような土器は地文が縄文である要素に引きずられている側面もあるだろうが、入組系横位連携弧線文土器萌芽段階の土器群としての理解も為し得よう。即ち、文様構成の要素は揃っているものの、口縁端部の刺突列や蛇行文系意匠を貫入する古い様相を示していることや、なによりも胴部懸垂文が縄文地図形として明瞭に獲



第6図 横位連携弧線文土器と連弧文土器



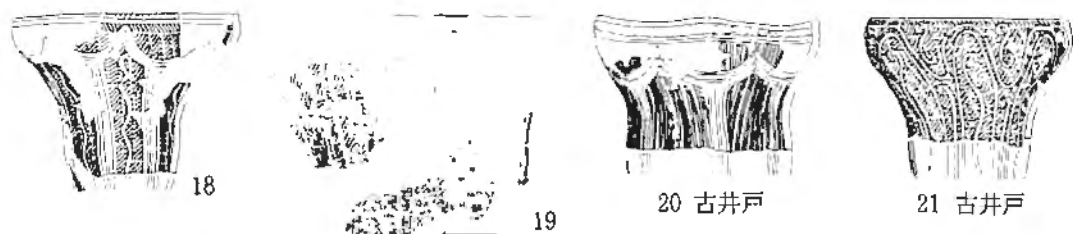
1～10 古井戸 J48住 (埼玉)



11～14 将監塚 J31住 (埼玉)



15～17 将監塚 J49住



18・19 古井戸 J134住

20 古井戸

21 古井戸

第7図 横位連携弧線文土器をめぐる土器群と共伴資料

得されていない（あくまでも無文部に懸垂文効果があり、縄文地部は弧線文を沿うように現象する）要素を有している点である。このことから、当該土器群や、先述の横位一次区画文を有さない連弧文土器の位置づけについては、連弧文土器の規定性とも絡めて、共通の理解を得るように努めなければならないであろう。また、21は、沈線のみに注目するならば、既に入組系横位連携弧線文土器の特徴を有しており、当該土器群の範疇に含め得るものであろうが、第14図5同様、意匠充填系土器の特徴である貧弱な“図／地”効果の影響をみてとることができる土器群であり、入組系横位連携弧線文土器の成立段階の錯綜した様相を示す一例であろう。

IV 個体別の系統分析

個別の土器の系統性について、Iで示した変遷観のもと、一括資料を中心に解説を加えることとし、今後の編年作業へ繋げる前提作業としたい。尚、近年の当該期土器群の資料増加は著しく一括資料の選択にあたっては苦慮したが、引用される機会の多い一括資料と、近年の良好な一括資料のなかから取捨選択して取りあげることとした。

荒砥前原遺跡4 T1住（第8図）

3は意匠充填系土器、5は入組系横位連携弧線文土器であり、EⅢ式土器（古段階）に相当する。1は複沈線により渦巻文と弧線文が一筆書き状に描出されており、貧弱な“図／地”効果という意匠充填系土器の文様描出技法を基層に据え、意匠充填系土器の主文様である渦巻文と横位連携弧線文土器の弧線文（乃至意匠充填系土器の副文様）を横位に連携したものであり、まさに意匠充填系土器と横位連携弧線文土器の接触を示している。2は対向系横位連携弧線文土器の弧線文間に、意匠充填系土器の主文様である渦巻文を、他の意匠と連携することなく独立して充填させている例であり、1同様、意匠充填系土器と横位連携弧線文土器の接触を示している。6は紡錘状の円形意匠を器面を縦位に分割する懸垂文間に充填しており、意匠充填系土器の強い影響を窺うことができる。この紡錘状の円形意匠とその配置は、おそらく対向系横位連携弧線文土器の個々の弧線文の図形化（パネル化）したものであり、やはり意匠充填系土器と横位連携弧線文土器の接触を示している。

荒砥二之堰遺跡15住（第9図）

2は横位連携弧線文土器に類似する土器群（第5図6・7類似）である。1は浮文系で、上半施文域で主文様である渦巻文（J字文風意匠）と副文様である方形区画意匠を相互に連携することなく個別に充填しており、下半施文域の懸垂文も上半施文域の意匠に沿うように充填・配置されていることから、まさに意匠充填系土器そのものである。EⅢ式土器（古段階）の土器であろう。

上手遺跡1住（第9図）

4は縄文地に浮文系の円形意匠を充填し、浮文系の懸垂文も器面の分割を行い、円形意匠の

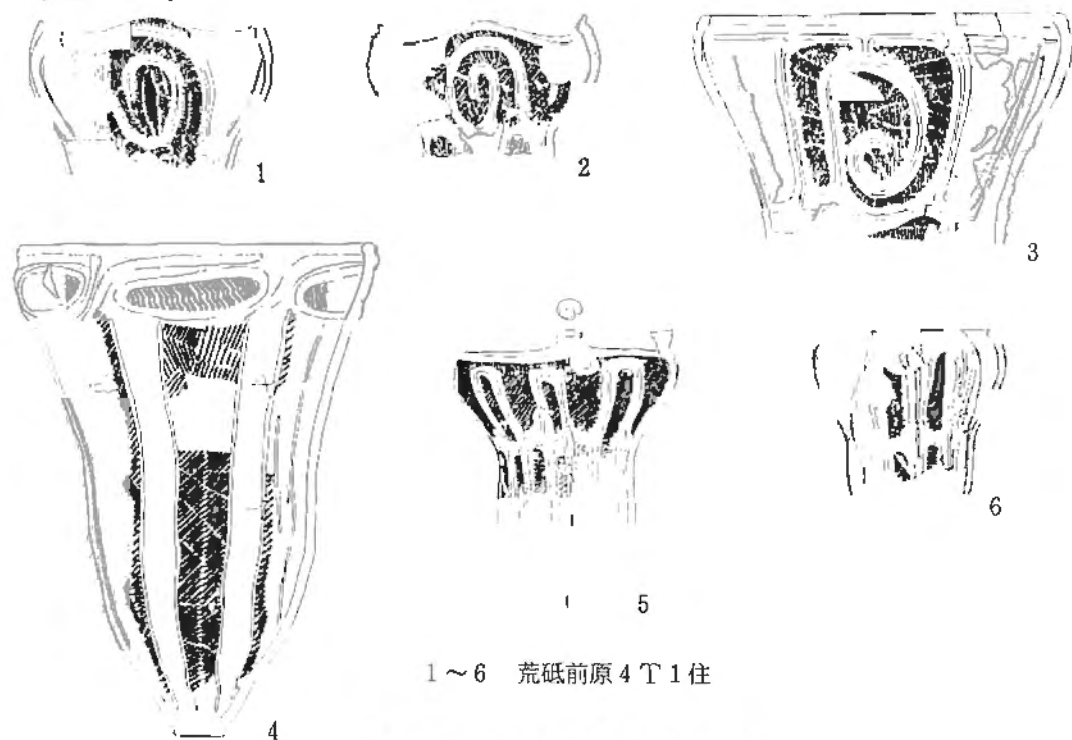
充填効果を引き立てている。“図／地”に欠け、意匠充填系土器の系譜を引く。3は意匠充填系土器の、単浮線の“隆帯+両脇のナゾリ”のナゾリ部、もしくは複浮線の2本の隆帯部を沈線化したものであり、沈文系でありながら見事に意匠充填手法を看取し得る土器である。“図／地”効果に長けており、EⅢ式土器（新段階）に含め得る可能性もあろう。

見立大久保遺跡39土坑（第9図）

12は対向系横位連携弧線文土器で、8は無文部が拡大し若干の“図／地”効果を有する意匠充填系土器である。7は8を沈線化した如き様相を呈する。弧線文風の副文様を、横位に連携することなく充填し、副文様間に主文様である紡錘状の円形意匠を充填するものである。3同様、沈文系意匠充填系土器とも呼ぶべきものである。概ねEⅢ式土器（新段階）に相当しようか。

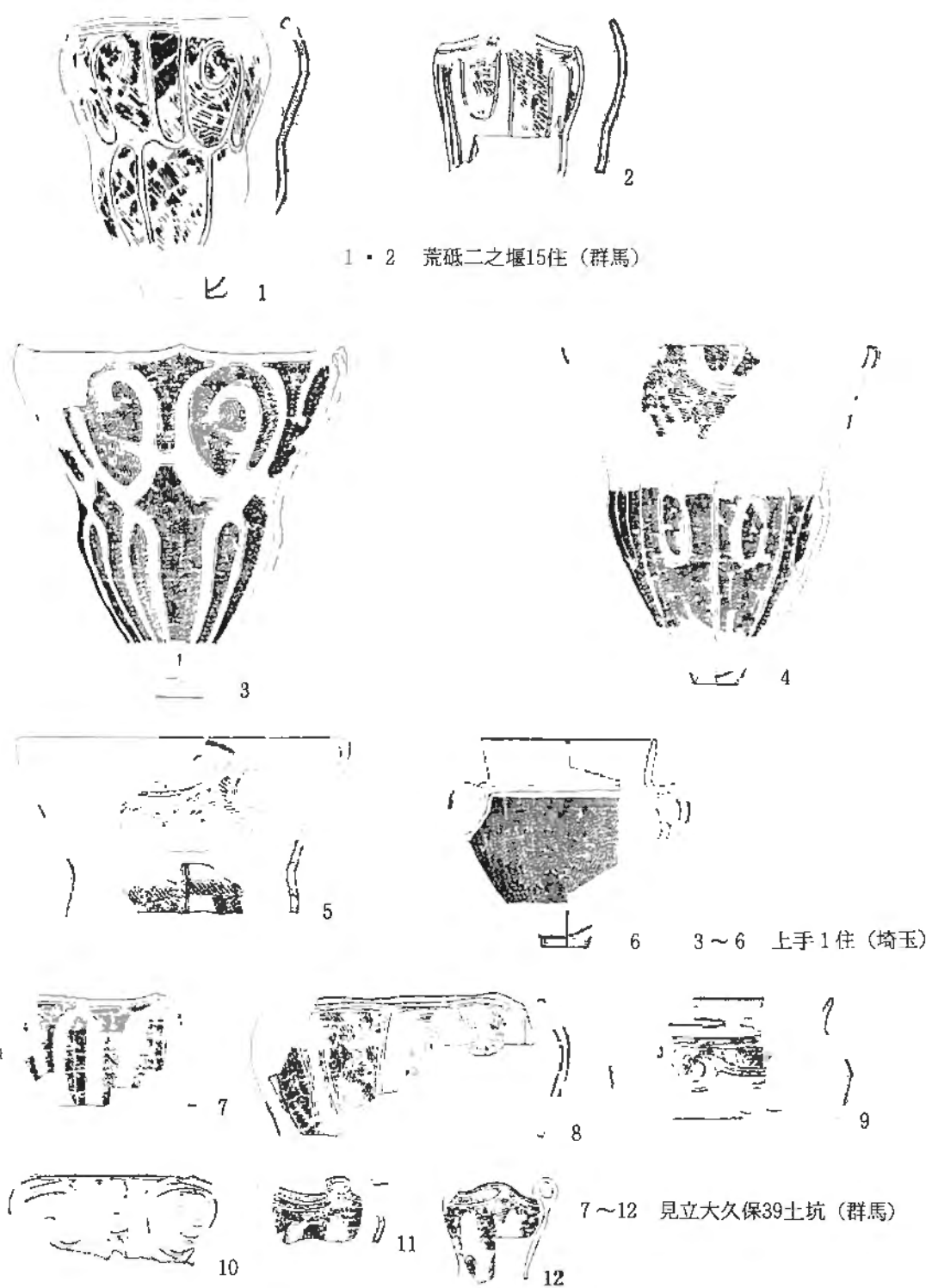
多田遺跡20住（第10図）

6は意匠充填系土器である。1は上半施文域で弧線文と渦巻文を横位に連携するように配し、この連携する意匠間に、意匠充填系土器の主文様である渦巻文を充填するもので、第8図2に類似する。くびれ部の横位一次区画効果を有する刺突列は、意匠充填手法を際立たせるために獲得されたもので、第11図4のそれと同様の効果を有するものである。ともあれ1は意匠充填系土器と横位連携弧線文土器の接触を示しているものといえよう。概ねEⅢ式土器（古段階）に相当しよう。

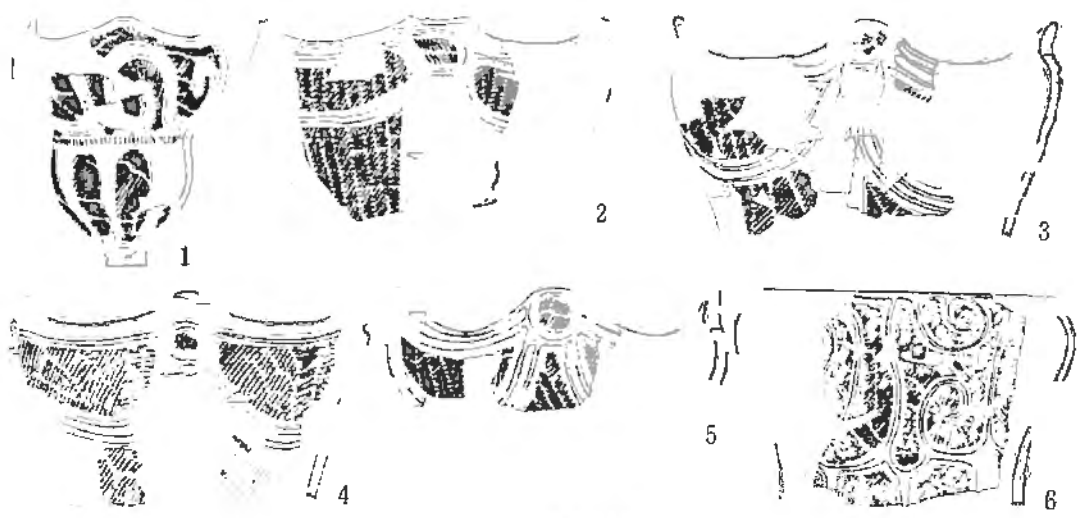


1～6 荒砥前原4T1住

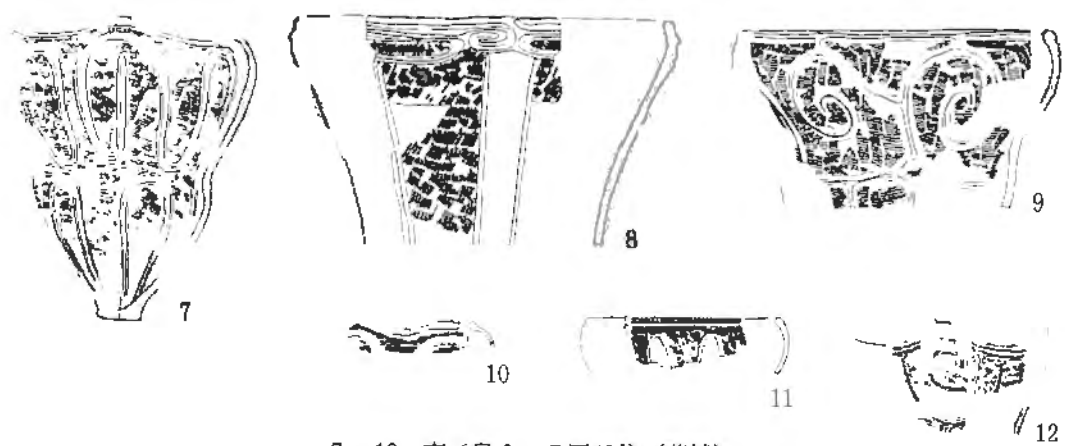
第8図 系統分析の実例と共伴資料(1)



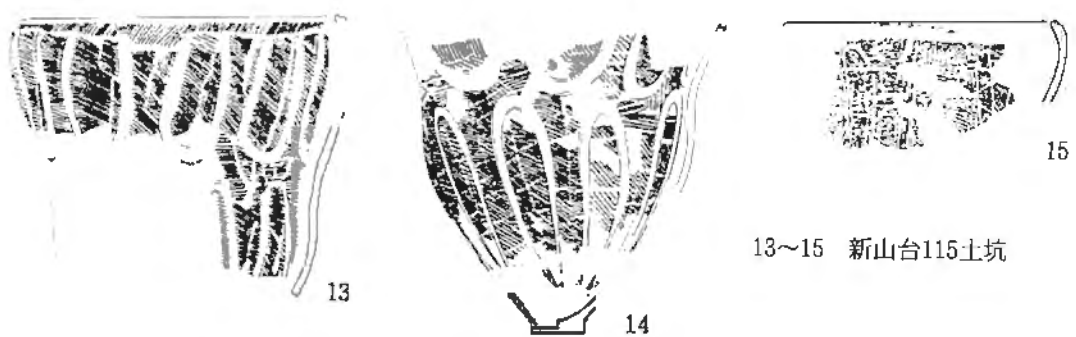
第9図 系統分析の実例と共伴資料(2)



1～6 多田20住

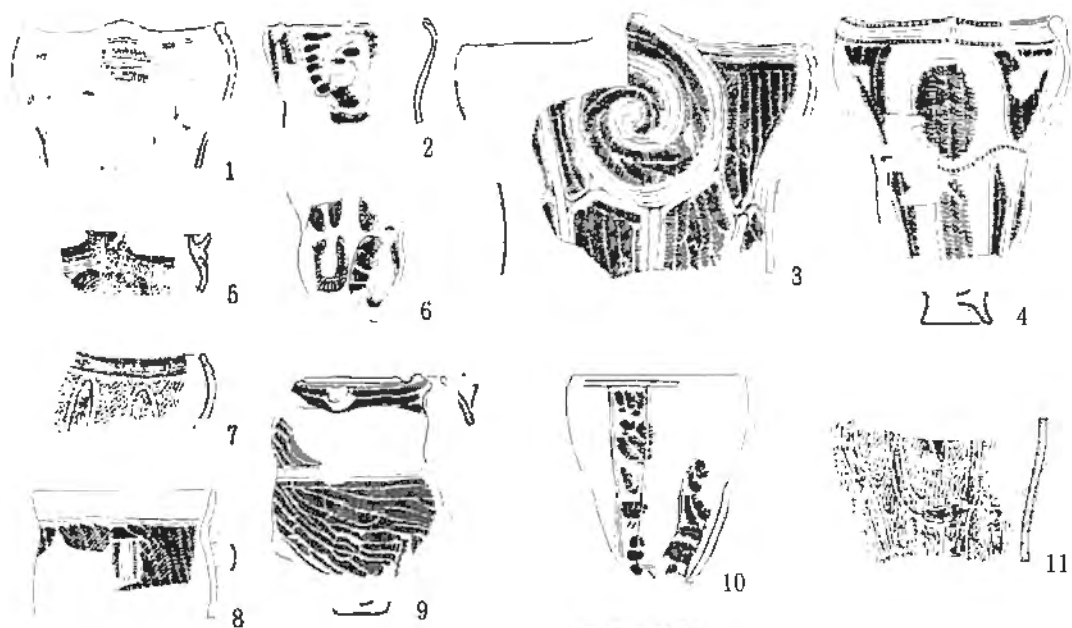


7～12 南三島6・7区42住（茨城）

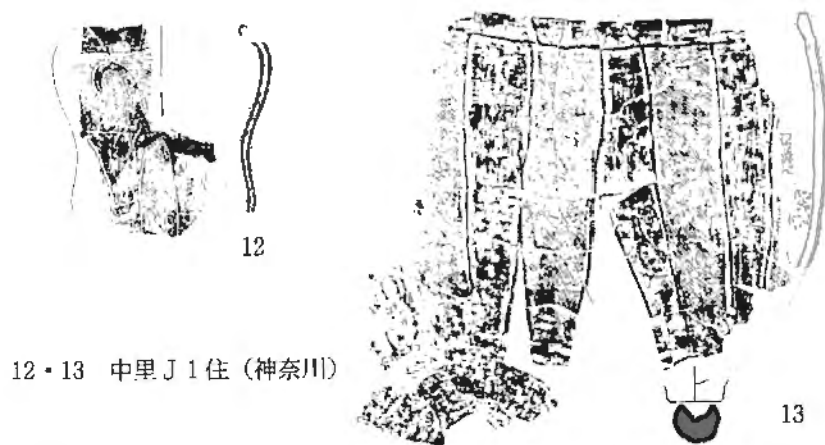


13～15 新山台115土坑

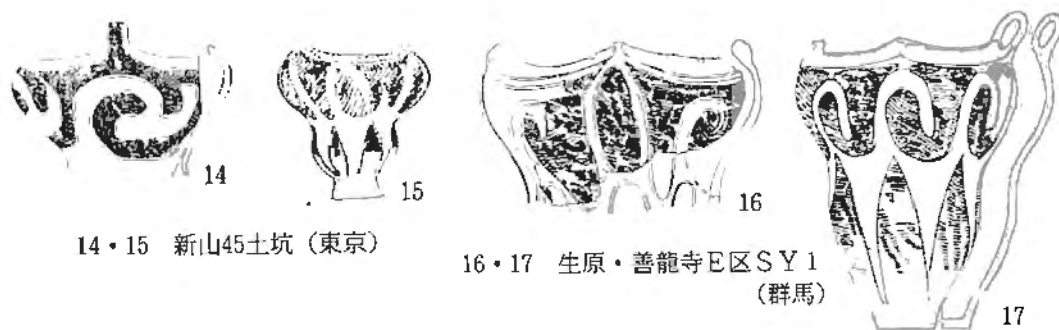
第10図 系統分析の実例と共伴資料(3)



1～11 囲護台038住



12・13 中里J1住（神奈川）



14・15 新山45土坑（東京）

16・17 生原・善龍寺E区SY1
（群馬）

第11図 系統分析の実例と共伴資料(4)

南三島 6・7区42住（第10図）

9・12は意匠充填系土器で、11は横位連携弧線文土器である。7は沈文系で、渦巻文と弧線文が一筆書き状に描出されており、貧弱な“図／地”効果という意匠充填系土器の文様描出技法を基層に据え、意匠充填系土器の主文様である渦巻文と横位連携弧線文土器の弧線文（乃至意匠充填系土器の副文様）を横位に連携したものであり、まさに意匠充填系土器と横位連携弧線文土器の接触を示している。文様構成法は第8図1と同類である。EⅢ式土器（新段階）に含め得ることには躊躇をおぼえる。

新山台遺跡115土坑（第10図）

13でまず注目すべきは地文縄文が口縁端部では横位に、以下では縦位に施されるという、横位連携弧線文土器にみられる特徴を有している点である。上半施文域の弧線文風の無文部意匠は縄文部の弧線文風意匠をも作出することとなる。無文部意匠を描出する沈線は、意匠充填系土器の沈文化の際の特徴である2本1対である。ともあれ、横位連携弧線文土器を基層に弧線文風の無文部意匠を充填し、結果として縄文地の弧線文をも描出する、意匠充填系土器と横位連携弧線文土器の接触を示す例であると言えよう。共伴資料に乏しいものの、概ねEⅢ式土器（新段階）に含め得るものであろう。

囲護台遺跡038住（第11図）

3は意匠充填系土器、6は大木9式土器の中位の部分に相当しよう。1は意匠充填系土器群の大柄の主文様である渦巻文を沈線化したものであり、沈線化が2本1対単位で為されるため、同心円状の渦巻文が幾重にも配されているように視覚されるが、“図／地”に注目すればさほどではない。2は横位に連携する弧線文間に意匠充填系土器の主文様である渦巻文をも連携させようと試みている土器である。基本的な文様構成法は横位連携弧線文土器的であるが、“図／地”の効果に極めて乏しい点などは、意匠充填系土器的でもある。一括資料としての時間的位置づけは、筆者の変遷観からみた場合、多くの矛盾があり（特に3・4）、その位置づけはなし得ない。個別には、2・3はEⅢ式土器（古段階）、4は新段階、1は両者の可能性があるだろう。

中里遺跡J1住（第11図）

13はEⅣ式土器である。12は渦巻文意匠を横位の連携に取り入れた横位連携弧線文土器であり、渦巻文系横位連携弧線文土器とも呼称すべき土器群である。注目すべきは、典型的な対向系横位連携弧線文土器はEⅣ式期では、個々の弧線文が口縁下横位一次区画文に付着する単位文となる特徴を有しているが、12は共伴資料と沈線の特徴（器面の硬化段階でのナゾリの顕著でない半肉彫状の細い沈線）からみてもEⅣ式土器であり、渦巻文系横位連携弧線文土器に関しては、EⅣ式期においては口縁下横位一次区画文に強く依存した単位文化が為されないことを示しているものといえよう。

新山遺跡45土坑（第11図）

14は帯縄文風の技法による渦巻文系横位連携弧線文土器であるが、厳密には弧線文が配されていないことから、横位連携渦巻文土器とでも呼ぶべき土器群である。ともあれ渦巻文を横位に連携しており伝統的な横位連携手法を堅持しており、17のように、あくまで閉じた図形である渦巻文を上半施文域に充填させる、伝統的な意匠充填手法を堅持する土器とは明瞭に区別されなければならない。15は弧線文と渦巻文が付着し同一の沈線により描出され、一個の図形（意匠）としてパネル化しており、意匠相互は横位に連携することなく、独立したパネル状の意匠として、上半施文域に充填される。あくまで伝統的な意匠充填手法を採る土器である。15は沈線の特徴からEⅣ式土器との評価は動かし得ないであろう。このことは渦巻文系横位連携弧線文土器や、渦巻文を有する沈文系の意匠充填系土器がEⅣ式期においても、口縁下横位一次区画文に付着した単位文化を示さないことを示している。これは本来より意匠充填手法をとる土器群が、既にEⅢ式期において、意匠上端を口縁下横位一次区画文に沿うように配していることや、渦巻文系横位連携弧線文土器の渦巻文自体が、口縁下横位一次区画文に付着せずとも強烈な単位文化効果を有しているからなのではなかろうか。

生原・善龍寺遺跡E区SY1（第11図）

16は15同様、弧線文と渦巻文が付着し、同一の沈線により描出された一個の図形（意匠）としてパネル化しているもので、やはり、意匠相互は横位に連携することなく、独立したパネル状の意匠として充填され、この意匠相互に紡錘状の円形意匠を更に充填しており、意匠充填手法をみてとることのできる土器である。注目すべきは、紡錘状の円形意匠両脇の無文部が口唇部へ抜ける特徴を有しており、明瞭なEⅣ式土器である点で、第16図13同様、紡錘状の円形意匠を有する渦巻文系横位連携弧線文土器については、無文部が口唇部へ抜け、明瞭な単位文化を獲得する可能性が強いという予測を為しうるのではなかろうか。17はEⅣ式土器に特徴的な沈線を有しており、渦巻文上端を口縁下横位一次区画文に沿うように充填しており、明瞭な意匠充填手法を採る土器である。16・17共にEⅣ式土器であろう。

V 系統分析からみた土器群の展開 ―千葉県内資料を中心に―

ここでは、Iでの変遷観に立脚しつつ、Ⅲの個体別の系統分析の結果を視座に据え、千葉県内の当該期土器群を大きく分類し、個別に解説を加え、各土器群の大局的な展開を示し、今後の編年作業へ繋げる前提作業としておきたい。

1、意匠充填系土器群

分析の前に、成立段階の意匠充填系土器各種の解説を加えておきたい（第4図）。意匠充填系土器の文様構成に注目すると、1・2・3のような渦巻文を上半／下半両施文域に施すものがある。当該土器群は、両施文域間に幅広の無文帯が挟まる例が他種に比べ量的に卓越する。

特に単浮線系（1・2）では顕著であり、渦巻系意匠の上下重畳配置という伝統が、前段階には認められないということと不可分ではないであろう。これに比して、複浮線系（3）では無文帯が認められない土器が増加するようであり、単浮線／複浮線の微妙な時間差を暗示するところでもあろう。4・5・6は下半施文域が懸垂文構成を採るもので、懸垂文が上半施文域の意匠に沿うように施されるもの（4・5）と、懸垂文上端と上半施文域の意匠下端をフラットにするもの（6）がある。7～9はキャリパー形土器の胴部に意匠充填手法がみられる土器群で、頸部での無文処理が卓越する。これに比べキャリパー形土器の口縁部文様帯に意匠充填手法を採る土器群については、頸部に相当する部位の認識すら為し得ない。このことはやはり、7・8・9については大木8b式土器との類縁性が強く、10・11については、口縁部文様帯の構成である“渦巻文+楕円区画文”という伝統から、意匠充填手法を採る渦巻文意匠の転写を容易に受容したものと理解し得よう。

紡錘状の円形意匠を有する土器群（第12図）

意匠充填系土器は磨消縄文の伝統から“図／地”効果を獲得し、無文部が拡大することとなる。1～4はこの無文部の拡大する過程を良く示しており、未だ主文様は渦巻文意匠を堅持している。概ねこれらの渦巻文は無文部の拡大に連動するように紡錘状の円形意匠に変化し、副文様は横位連携弧線文土器の影響のもと、弧線文として採用される。但し7の主文様は渦巻文意匠の面影を色濃く残すこととなる。概ねEⅢ式土器（新段階）では下半施文域での渦巻文系意匠は消失するが、10などは未だ渦巻文的な処理方法が下半施文域にみとれる。またこの10の主文様は紡錘状の円形意匠ではなく円形を呈しており、更に副文様と連携するが如く処理されている。但しこの連携部は9の紡錘状の円形意匠上部のアクセント（意匠充填系土器群の特徴である）と相同のものである可能性もあり、一概に横位連携弧線文土器の影響を強調し得ないであろう。8のくびれ部の刺突による横位一次区画効果は、第10図1同様意匠充填効果を引き立たせるために獲得されものである。

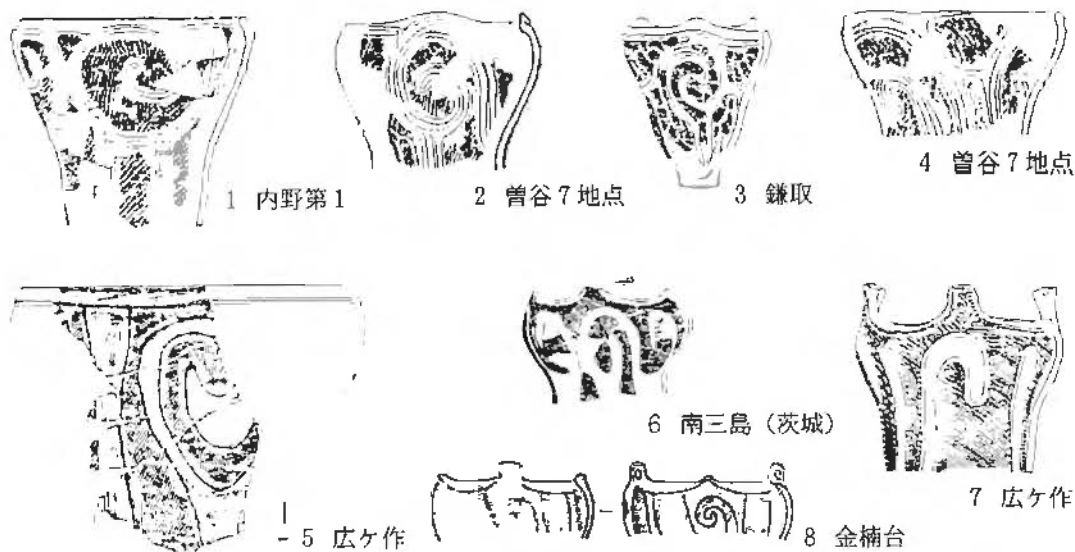
1はEⅢ式土器（古段階）であり、2～4と5～10は型式学的にみても時間差はあろうが、一括資料をみる限り、概ねEⅢ式土器（新段階）に相当する可能性が高い。

上下の意匠が入り組む土器群（第13図）

意匠充填系土器は、器面に意匠を充填する手法が卓越しているため、意匠相互が入り組み易いという性格を内包している。おそらく1・2は入組系横位連携弧線文土器の影響を受けた意匠充填系土器であり、3の副文様は横位連携弧線文土器の弧線文の影響を示すものであろう。共に下半施文域の懸垂文が上半施文域の主文様である渦巻文を巻き込むかたちでの文様構成法が採られている。4は若干の無文部の拡大が看取され、5は明瞭な無文部の拡大がみとれる。概ね1～4はEⅢ式土器（古段階）で、5はEⅢ式土器（新段階）に相当しよう。沈文系の6は第19図に示した土器群にも含み得るもので、副文様である渦巻文を横位に連携するように配



第12図 意匠充填系土器群の展開(1)



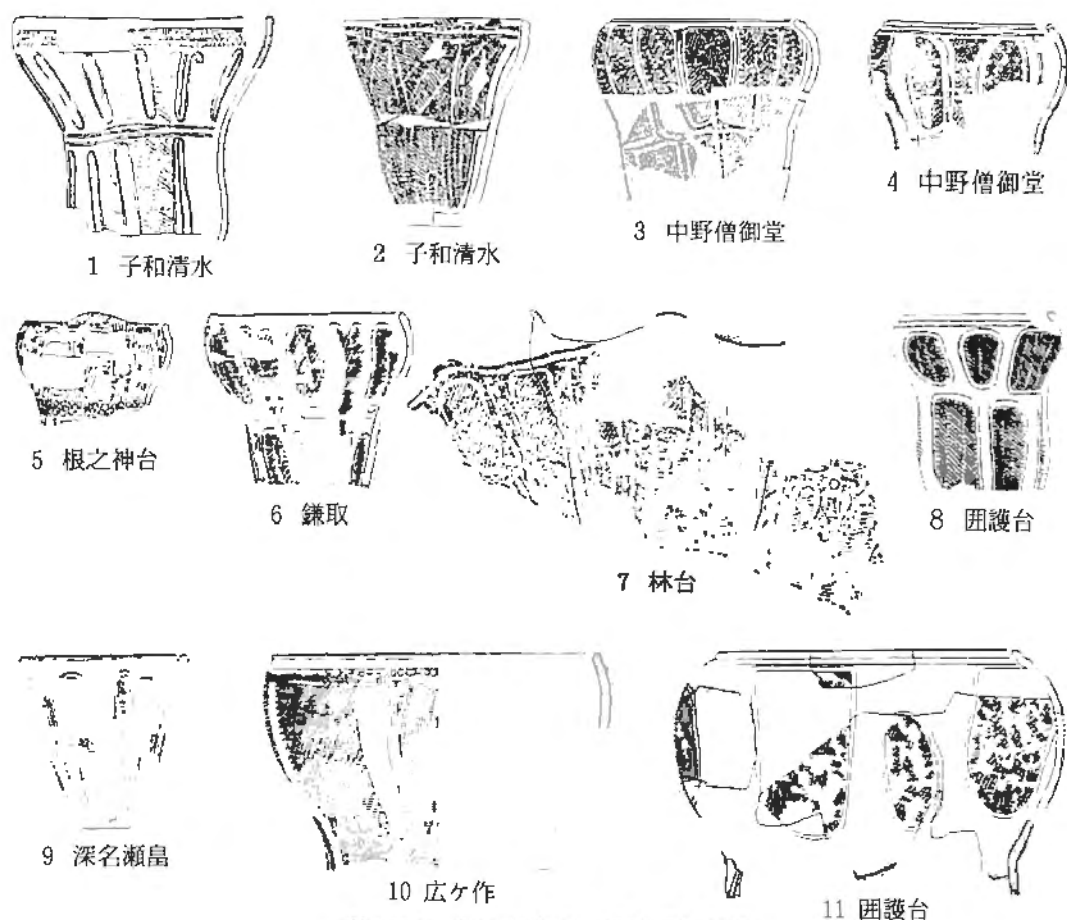
第13図 意匠充填系土器群の展開(2)

し、連携する意匠間に主文様である入組懸垂文を充填させる文様構成を採るもので、横位連携弧線文土器の影響を強く看守し得る。7も沈文系であるが、図／地の反転こそあれ、無文部による懸垂文風意匠を充填するものである。6・7はおそらくEⅢ式土器（新段階）に相当し、当該文様構成法を採る土器は、EⅣ式期にも8のような顔つきで存続するようである。

方形区画を有する土器群（第14図）

3のような土器は、対向系横位連携弧線文土器の弧線文と懸垂文の意匠充填化のなかから成立する可能性があると同時に、前段階に存在する1・2のような土器との関係性も考慮されなければならないであろう。4は3の無文部が拡大したものであり、7・8は当該土器群の沈文化した土器で、蛇行懸垂文を配し、意匠の充填間隔が密で、“図／地”効果にやや乏しい土器群と、8のように無文部が拡大し意匠が単位文として安定して充填されるものでは時間差があり、11は主／副文様構成を採ることから、当該土器群と同種ではないものの、概ね11のように、口縁下横位一次区画文に沿うように意匠が充填されるものが、最も新しい様相を示すこととなろう。3はEⅢ式土器（古段階）、4・7も積極的にEⅢ式土器（新段階）に含み得ないもの、8はEⅢ式土器（新段階）で、11はEⅣ式土器の可能性もあろう。

5は縄文地に楕円形の意匠を充填するもので、第7図21同様“図／地”効果に欠け、意匠充填系土器の希薄な“図／地”効果の影響を直接受容している。くびれ部に配される横位一次区画効果を有する刺突列は、第10図1・第11図4同様の、意匠充填効果を際立たせるために獲得されたものであろう。6は7に類似するが、充填された紡錘状の円形意匠を抱えるように単沈線による弧線文を充填するもので、弧線文は連携しないものの横位に規則的に充填され、弧線文間に縄文が充填される部分も認められ、全体として“図／地”効果に欠ける側面をも有して

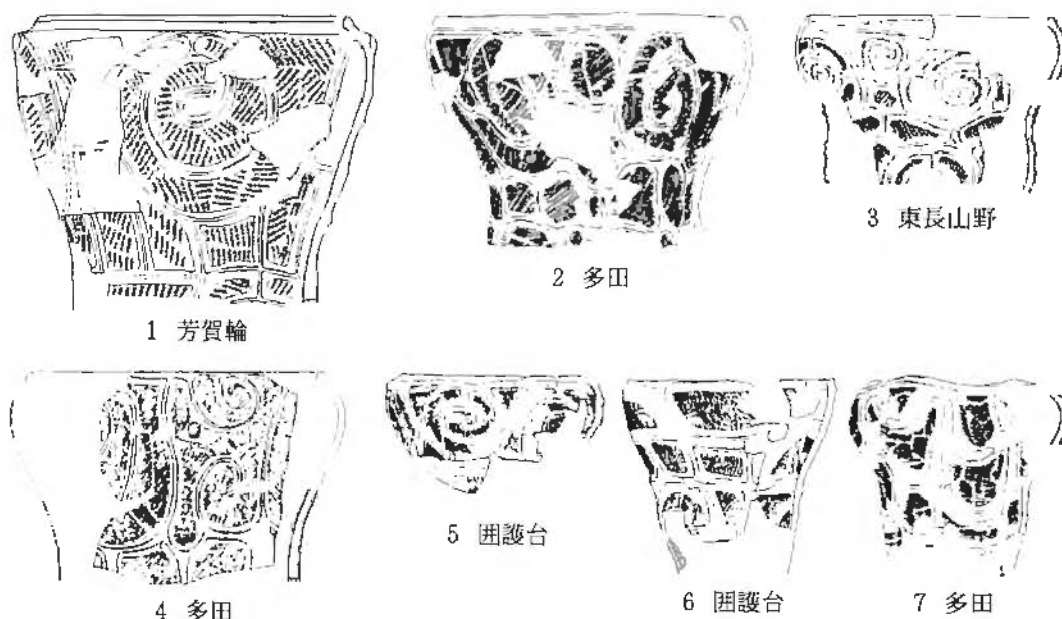


第14図 意匠充填系土器群の展開(3)

いる。やはり横位連携弧線文土器の影響を受けた意匠充填系土器であるといえよう。沈文系の9は方形区画意匠の単位文化ではなく、対向系横位連携弧線文土器を意匠充填化したものと思われるが判然としない。10は縄文地に沈文による無文部の方形区画意匠を充填するもので、結果として、縄文部の意匠充填効果をも醸し出している。5はEⅢ式土器（古段階）、6・9・10はEⅢ式土器（新段階）の可能性もあろう。

構成の乱れる一群（第15図）

典型的な意匠充填系土器群、基本的には主文様＋単純な副文様という構成を採るが、1～3は主文様外の空隙部に小柄の意匠を多く充填するもので、主文様は明瞭であるが、副文様は分割され副文様群となるものである。意匠充填系土器の構成に乱れが生じたものとして捉え得る土器群である。4・5も典型例からの型式学的距離を示しているものである。6・7は不定形意匠が充填されるもので、無文部が拡大し単位文効果を有しており、やや新しい様相を示していると思われる。1～5はEⅢ式土器（古段階）であろうが、6・7はEⅢ式土器（新段階）の可能性もあろう。



第15図 意匠充填系土器群の展開(4)

沈文系意匠充填系土器群 (第16図)

これまでも沈文系の意匠充填系土器群の解説を行ってきたが、ここに示す沈文系意匠充填系土器群とは、意匠充填手法を採りつつも、沈線による文様描出が一般的な意匠充填系土器である。1・2は“充填する主／副文様構成＋胴部懸垂文構成”を採りながらも、随所に横位に連携する意識が顕在化しており、2は第15図1と伴出していることから、胴部の懸垂文も、意匠充填系の懸垂文の無文部が拡大したものではなく、横位連携弧線文土器の懸垂文の影響を示していると思われる。よって、感覚的には容認し難いものの、1・2共にEⅢ式土器（古段階）に相当し、当段階での意匠充填系土器群と横位連携弧線文土器の顕著な接触を示しているものと言えよう。このような土器群から展開した土器群が3～9であろう。3は個体自体に横位一次区画文が存在せず、意匠が口縁に沿うように充填される。4～8は口縁下横位一次区画文に沿うように意匠上端部が閉じたパネル状の渦巻文を充填している。このような渦巻文系意匠を有する土器は、渦巻文系横位連携弧線文土器同様、渦巻文自体が口縁下横位一次区画文に付着せずとも強烈な単位文効果を有しているため、9の如く横位一次区画文に付着・依存した単位文化の様相を示す例（EⅣ式土器）は希薄で、EⅢ／Ⅳ式土器の弁別に著しい困難をきたすこととなる。4は渦巻文を抱えるように下半での縄文地が卓越しており、3・5・6はEⅣ式土器の沈線の特徴（器面の硬化段階でのナゾリの顕著でない半肉彫状の細い沈線）を有していないことから、EⅢ式土器（新段階）の可能性があり、沈線の特徴から、7・8はEⅣ式土器であろう。

10～13に示した土器群は、弧線文系の意匠間に紡錘状の円形意匠を充填するもので、13については先述の通り、紡錘状の円形意匠を有する渦巻文系横位連携弧線文土器については、無文部が口唇部へ抜け、明瞭な単位文化を獲得する可能性が強いという予測からEⅣ式土器であろうが、10～12の評価が困難である。例えば10・12は7と同様に、口縁端部の無文部に縦位のアクセントを有しており、13の口唇部へ抜ける無文部位と相同なもので、このアクセントが意匠充填系土器群の特徴のひとつであるという考えが許容されるならば、沈線の特徴と絡めても10・12はEⅣ式土器である。11はEⅣ式土器に特徴的な沈線を有しておらず、EⅢ式土器（新段階）の可能性もあるが、例えば第20図11のような土器群の弧線文の単位文化から説明し得る点も考慮されることから、いまひとつ判然としない。

2、横位連携弧線文土器群

ここで謂う横位連携弧線文土器とは、既に解説してきた通りであるが、例外的な土器群（第19図1～8）も便宜的にここで取り扱うこととする。

対向系横位連携弧線文土器（第17図）

1・2は連弧文土器の弧線文風の意匠がキャリバー形土器の口縁部文様帯に転写された可能性のあるもので、横位連携弧線文土器ではないが、成立段階の錯綜した様相を示すものとして図示した。3は複沈線による弧線文を充填するもので“図／地”効果に欠けるものであり、本来ならば意匠充填系土器群の範疇で取り扱うべきであるが、4・7と系統を異にする例としてここで取りあげた。5は“図／地”効果に乏しい土器群で、意匠充填系土器群の影響を認め得るものであるが、文様構成法はキャリバー形土器に近く、1・2同様成立段階の錯綜した様相を示すものとして図示した。6の文様構成法はやはりキャリバー形土器に類似するが、キャリバー形土器の口縁部文様帯下の横位一次区画文が波状を呈していると同時に“図／地”効果に乏しいことから、1・2・3・5同様成立段階の錯綜した様相を示すものとして図示した。

4・7～11は対向系横位連携弧線文土器の典型例で、概ねEⅢ式土器（古段階）に相当しようが、11は若干疑問が残る。4・7・8のように弧線文を複沈線で描出したり、7のように胴部懸垂文の分割に比べ上半での弧線文の分割が大きいものは、EⅢ式土器（古段階）のなかでも、型式学的には古い要素を有していることから若干古相のものかもしれない。12～14のように弧線文の波頂部が鋭利になり、単位文化の萌芽を看取しうる土器群が概ねEⅢ式土器（新段階）、17・18のように口縁下横位一次区画文に付着した単位文として捉え得るものがEⅣ式土器である。15は球状の意匠を横位連携に取り込んだ土器群の系譜を引く可能性もあり、単位文化は認められないが、EⅣ式土器に特徴的な沈線を有している。

入組系横位連携弧線文土器（第18図）

1は上半施文域に弧線文風の意匠が連携されることなく充填されるもので、厳密には横位連携効果を有さないもので、意匠充填系土器群の影響も認め得るが、便宜的にここに取りあげた。



1 新山台



2 芳賀輪



3 南三島 (茨城)



4 林台



5 指扇下戸 (埼玉)



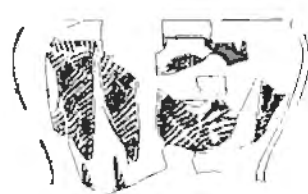
6 大蔵 (東京)



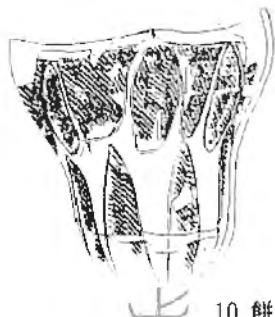
7 西原大塚 (埼玉)



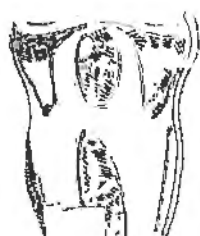
8 清里陣場 (群馬)



9 南三島



10 餅ヶ崎



11 南三島

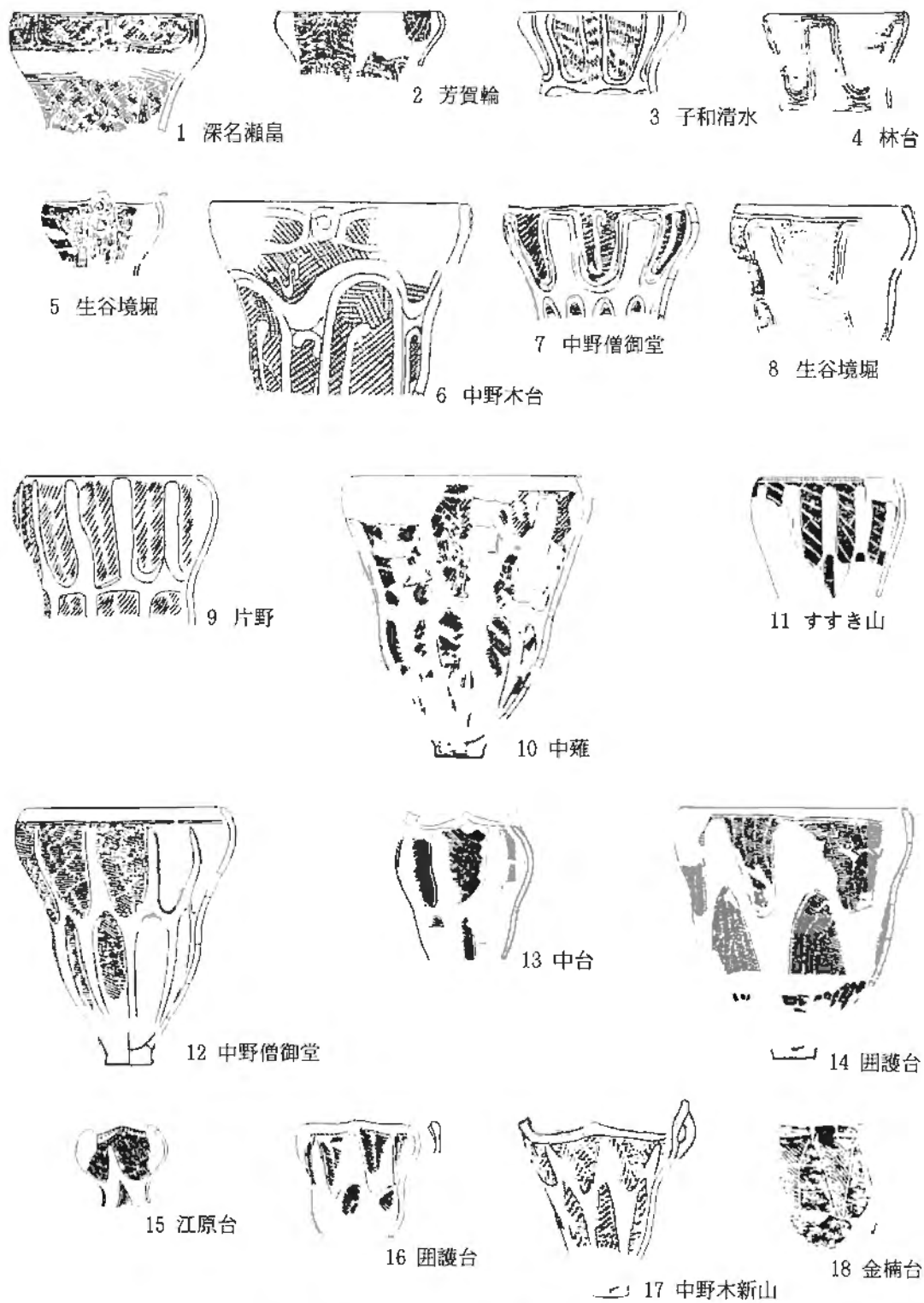


12 江原台

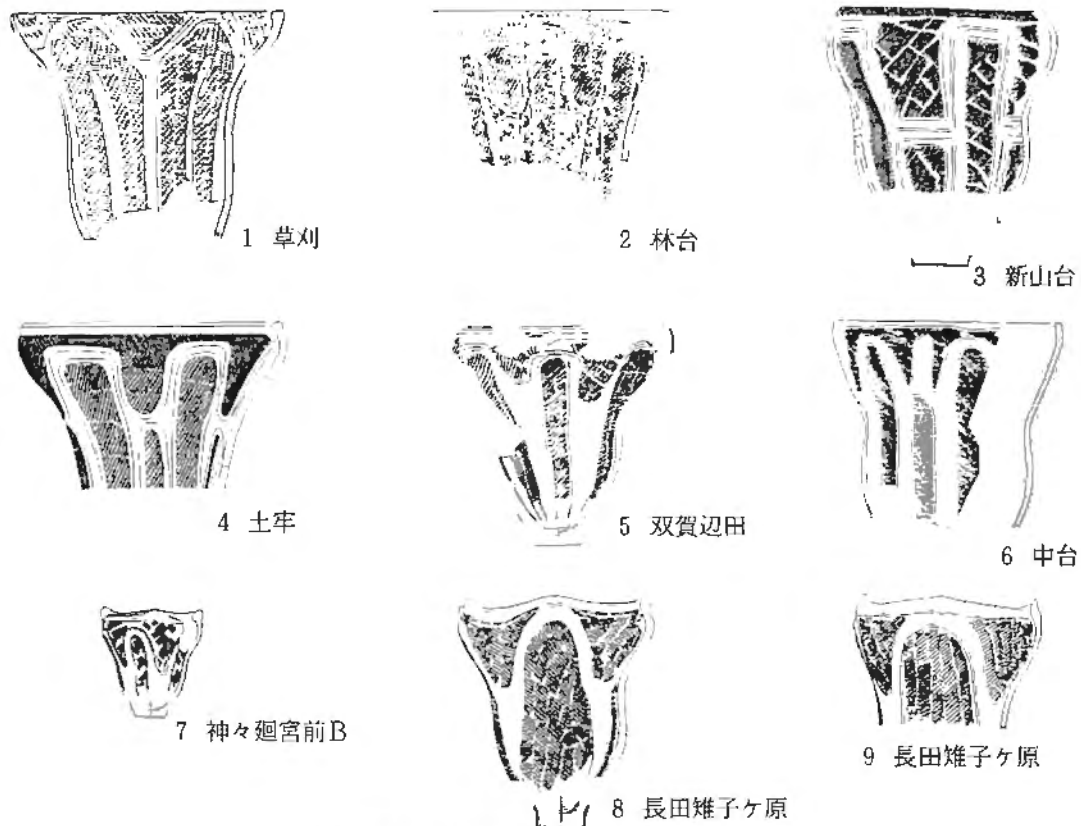


13 江原台

第16図 沈文系意匠充填系土器群の展開



第17図 横位連携弧線文土器群の展開(1)



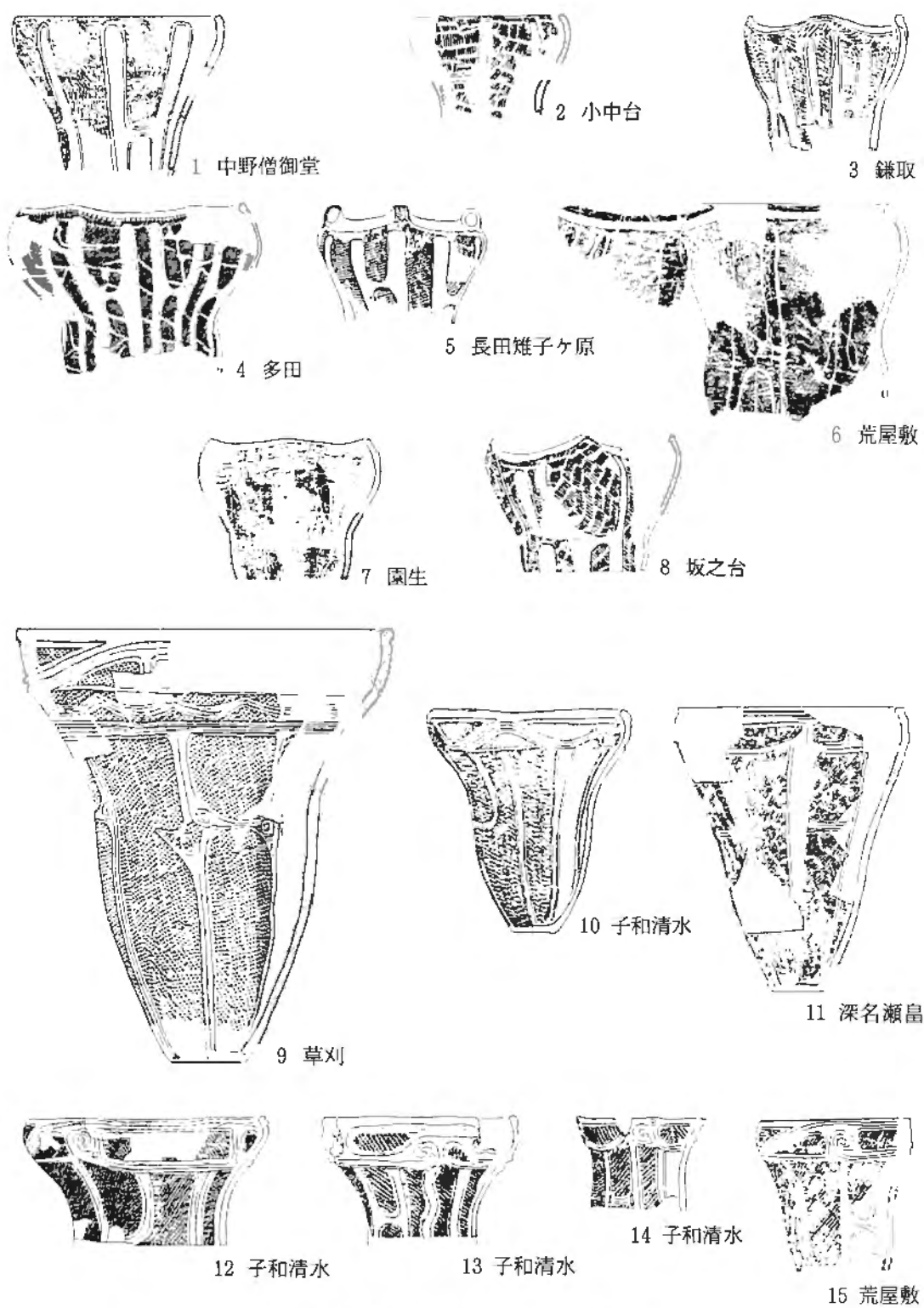
第18図 横位連携弧線文土器群の展開(2)

2～4は意匠の間隔が密で、3は複沈線により意匠を描出している。2～4はEⅢ式土器（古段階）に相当し、無文部が拡大した5～7はEⅢ式土器（新段階）に相当しよう。これらの土器群の単位文化の為されている例としては、8・9をも便宜的に含めた浮文系入組懸垂文土器群（第21図）が相当しよう。

横位連携弧線文土器に類似する土器群（第19図）

1・2は入組系横位連携弧線文土器に類似するが、懸垂文が入り組むのではなく、弧線文の横位の連携に取り込まれたもので、この懸垂文によって弧線文相互の横位の連携が遮断されていることから、厳密には横位連携弧線文土器ではない。当該土器群の生成についてはうまく説明し得ないものの、加曾利EⅡ式期以来、大木8b式土器の影響のもと胴部懸垂文を上下に分割する土器群が安定しており（9～15）、これらの土器群がその生成に大きく関与している可能性が高い。

ともあれ、横位連携弧線文土器の一連の解説から、1・2はEⅢ式土器（古段階）であり、3・4はEⅢ式土器（新段階）の可能性が高かろう。5・6はEⅣ式土器の可能性もある。当該土器群に、主文様として球状意匠を獲得した例がある。7はEⅢ式土器（新段階）、8はEⅣ式土器であろう。



第19図 横位連携弧線文土器群の展開(3)

球状意匠を横位連携に獲得した土器群（第20図1～6）

対向系横位連携弧線文土器に、主文様の如く球状意匠を、その連携内に取り込んだもので、第12図10同様、球状意匠の連結部が、意匠充填系土器群に特徴的な縦位の浮文系のアクセントと相同のものであるならば、意匠充填系土器群の、紡錘状の円形意匠を有する土器群と、対向系横位連携弧線文土器の接触から生成した可能性の土器群でもある。当該土器群はEⅣ式期にあっても単位文化のみられない土器群であり、特徴的な沈線の獲得の有無から、1～3はEⅢ式土器（新段階）に相当する可能性が強く、4はEⅣ式土器かもしれない。

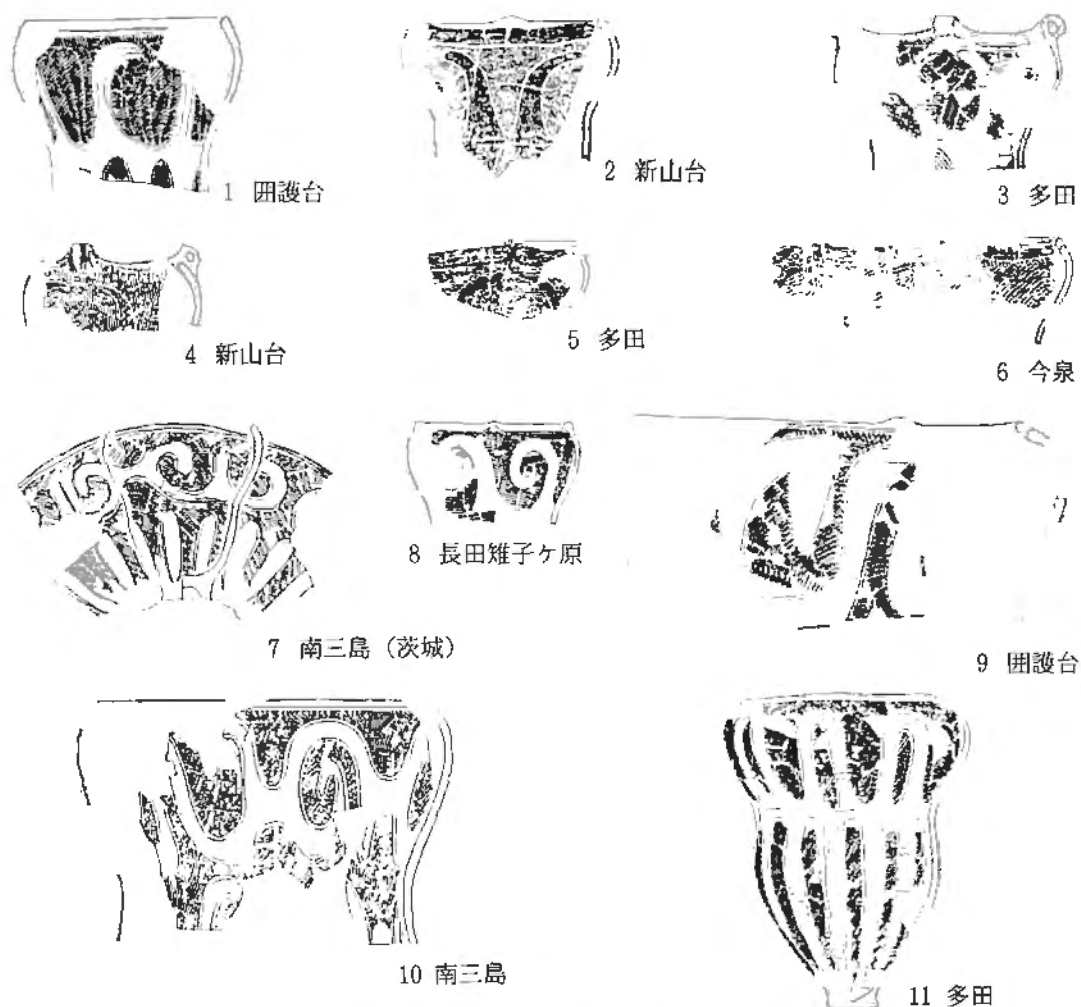
例外的な個体として、11は横位連携弧線文土器の弧線文間に紡錘状の円形意匠を充填するもので、横位連携弧線文土器と意匠充填系土器群の接触を示すものであるが、整然とした文様構成を採るわりには量的に目立つことがなく、第16図11のような土器群の前段階としての評価も為し得るが、本例は一括資料からEⅢ式土器（古段階）の可能性が高く、文様構成にあまり変化のみられない土器群（第23図1・2）がEⅣ式期にも存在することから、量的問題はさておき安定した類型であろう。

渦巻文系横位連携弧線文土器（第20図7～10）

概ね第16図1・2のような土器群の系譜を引くもので、7は渦巻文を横位に連携しているものの、懸垂文は縄文地に無文部を充填するが如く配されており、更に縄文地は懸垂文上部で連携し、この連携が渦巻文の意匠充填効果を引き出しているもので、意匠充填系土器群の影響を強く受けた土器である。8・9はEⅣ式期にあっても、口縁下横位一次区画文に付着したところの単位文化を看取し得ない土器群で、EⅣ式土器に特徴的な沈線の獲得の有無からみてもEⅢ／Ⅳ式土器の区別が困難である。10は渦巻文系横位連携弧線文土器の連携する意匠間に更に渦巻文を充填しており、意匠充填系土器群の影響を看取しうるが、この充填された渦巻文がまた更に相互に連携している特殊な例である。下半施文域の様子は不鮮明であるが、意匠充填系土器群系譜の意匠が配されているようである。EⅢ式土器（新段階）であろう。

3、加曾利EⅣ式土器の主要類型

加曾利EⅣ式土器の型式学的概念について、主に意匠の単位文化という側面から規定してきたが、この規定に準拠しない土器群も現実存在する。現段階では、これらの土器群のEⅢ／Ⅳ式土器の弁別についての理論的な追求をするよりも、各研究者が“概ね加曾利EⅣ式土器である”と納得するような視準的な類型を、便宜的に加曾利EⅣ式土器として設定し、一括資料でのチェックと理論的追求を同時に為すべきであると私考している。この意味からも、加曾利EⅣ式土器の主要類型の解説を行っておきたいと思う。尚、対向系横位連携弧線文土器も主要類型のひとつであるが、既に解説しているのでここでの取り扱いは避けた。また第11図13のような土器についても省略している。



第20図 横位連携弧線文土器群の展開(4)

入組懸垂文土器群 (第21図)

入組懸垂文土器群(註9)は、概ね加曾利E IV式土器と捉えられてきた土器群で、旧稿においても単位文化の評価から加曾利E IV式土器としてきたものである。特に11～14のように無文部が口唇部へ抜け単位文化するものや、16のように縄文部が口唇部へ抜け単位文化するものを具体例として提示した。いまあらためてこの入組懸垂文土器群を瞥見すると、1・2は弧線文の横位の連携効果が色濃く残っている。3～7は弧線文を縁取る無文帯相互が口縁下横位一次区画文下の縄文地部で連結し、浮文系のアクセントとなっている。8・9はこのアクセントが口縁端部無文帯中に獲得されており、10の環状突起は8・9例のアクセントに相当すると共に、11～14例の口唇部へ抜ける部位にも相当する。



1 長田雉子ヶ原



2 長田雉子ヶ原



3 多田



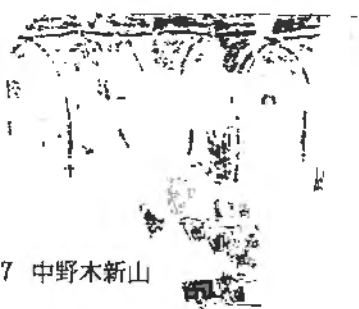
4 中台



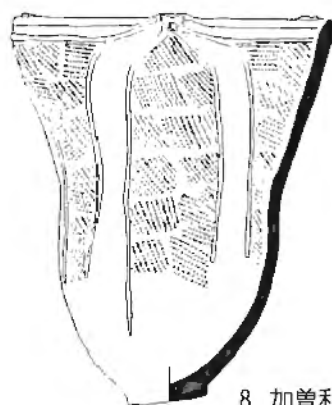
5 吉原三王



6 多田



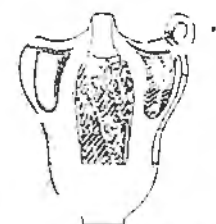
7 中野木新山



8 加曾利南



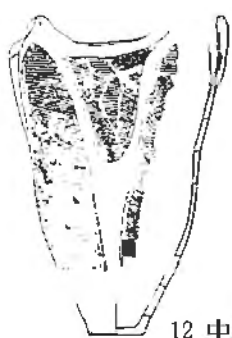
9 長田雉子ヶ原



10 中野僧御堂



11 築地台



12 中野僧御堂



13 中台



14 千代田



15 神々廻宮前B



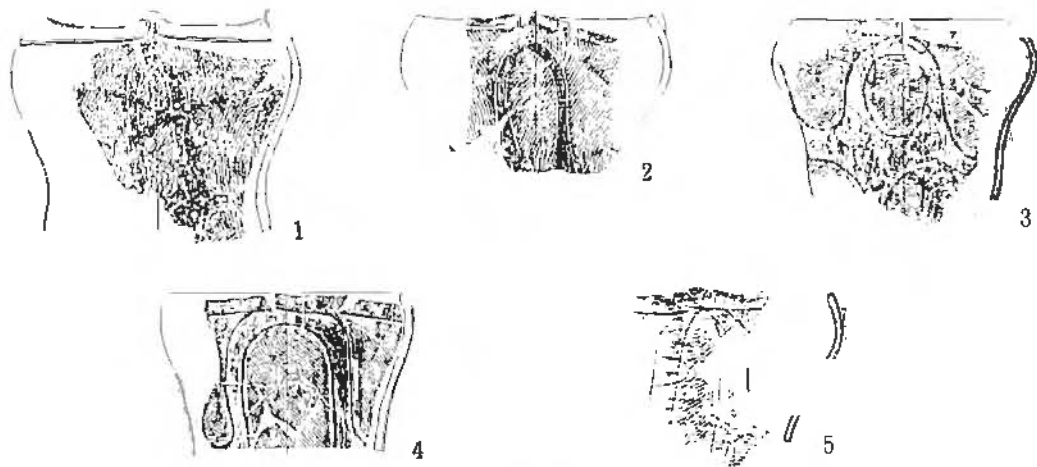
16 一の谷西

第21図 入組懸垂文土器群



第22図 球抱文土器群

先述の通り、文様構成法のみに着目すれば、入組系横位連携弧線文土器の単位文化した姿としての評価が為しうるものの、EⅢ式期での入組系横位連携弧線文土器の意匠描出技法はほぼ沈文系に限定され、EⅣ式期での浮文系主体の様相との差異は極めて大きいものと言えよう。また弧線文の単位文化を描出すると思われる3～9の無文帯連結部のアクセントは意匠充填手法を採る土器群に認められる特徴であり、このアクセント部の描出と浮文系の卓越化は、意匠充填系土器（主に紡錘状の円形意匠を有する土器群 第12図）と入組系横位連携弧線文土器の強固な統合によって成立している可能性が高かろう。このように考えると、1・2はアクセントは認められず、弧線文の横位の連携効果を看守し得ることから、浮文系ながら、典型的な入組懸垂文土器とは様相を異にし、時間的に若干先行する可能性もあろう。但し、アクセントを有しないものの、横位の連携効果を有しない土器（第23図4）も存在することから、確定的で



第23図 砂川遺跡 (33号住一括資料)

はない。

アクセントを体部縄文地部や口縁端部の無文部に有する一群と、口唇部へ抜ける一群が、アクセント部の上昇と形骸化という説明によって、微妙な時間差であるのと捉えられるものなのか、同時期での処理方法の差であるのかも将来的には問われなければならないであろう。現段階では、大木10式土器の無文帯が口唇部へ抜けていく様相に連動するようなものであろうとの予測を持っているが、判然としない。

ともあれ、1・2を除けば、ここに示した土器群はEⅣ式土器であり、今後の一括資料の増加を待って、他類型の土器群の様相を再吟味したいと思う。

球抱文土器群 (第22図)

球抱文土器群(註10)は、やはり概ね加曾利EⅣ式土器と捉えられてきた土器群で、旧稿においても単位文化の評価から加曾利EⅣ式土器としてきたものである。但し筆者が扱った8・9は当該土器群のなかではむしろ特異な土器であり、単位文化からみてEⅣ式土器であるとの評価は動かないものの、これをもって球抱文土器群全体を分析しているとはいいい難い。旧稿では6のような弧線文の横位の連携効果の強いものについては、弧線文の単位文化に固執するあまり、EⅢ式土器(新段階)に相当するのではないかとの予測を持っていたが、近年の資料増加からみると、やはり概ねEⅣ式土器であるとの認識に至っている。この意味では旧稿での誤りを認めておかなければならない。しかし、1・2・3のように球状意匠が大きく、弧線文間にしっかりと充填され、且つ弧線文の横位連携効果の強いものはEⅢ式土器(新段階)ではないかとの疑念は現在でも有している。

球抱文土器群の成立は、弧線文が横位連携効果を有しており、球状意匠が充填されるものの、アクセント部の描出に乏しいことから、横位連携弧線文土器群の影響を強く受けた意匠充填系

土器群（紡錘状の円形意匠を有する土器群 第12図）であるとおもわれる。尚、EⅣ式土器の特徴である単位文化という側面に照射させるならば、1・2・3のように球状意匠が大きく、無文部が狭く、弧線文間にまさに充填され、且つ弧線文の横位連携効果の強いものと、4・5・6のように横位の連携効果が低下し、球状意匠が小型化し、弧線文間に浮くように独立・単位文化したものでは、若干の時間差があるのは確実で、4・5・6に限定してEⅣ式土器とし、1・2・3に関しては、第21図1・2同様、若干先行するものとして捉え、EⅢ式土器（新段階）に相当する可能性を指摘しておきたい。

おわりに

意匠充填系土器群と意匠充填手法（効果）、横位連携弧線文土器群と横位連携手法（効果）、この加曾利E式土器後半期の上器群に貫徹される2つの大きな文様構成法に注目し、系統分析を行いながら、類型をおさえ、その展開の予測について述べた。この2つのおおきな文様構成法の統合・接触が加曾利EⅣ式土器の生成に大きな意味をもつことも明らかになってきた。しかし今尚、加曾利EⅢ式／EⅣ式土器の区別をし得ない土器群が多く存在し、今後の一括資料の増加を待ちつつ検討を重ねなければならない。千葉県内においても、近年の、長田雉子ヶ原遺跡・多田遺跡・林台遺跡・囲護台遺跡群等、資料の充実ぶりがめざましいものの、筆者自身未だ説得力ある変遷観を獲得するには至っていない。そのような意味からも本稿を配列・編年の前提作業であるとの副題を冠したわけである。諸氏の批判を仰ぐと共に、いずれ機会をみて加曾利E式土器後半期の編年案を提示したいと思う。

謝辞

本稿を草するにあたって、石井寛氏・稲村晃嗣氏・鈴木徳雄氏からは数多くの有益な御教示を賜った。とりわけ石井寛氏とは資料実見に同伴させて頂く機会が多く、日頃より中期後半から後期前半の土器群に関する諸問題について多くの意見を交わす機会を頂戴しており、有益な御教示を数多く賜っている。心より感謝する次第であります。

また、下記の諸氏からは、資料実見・文献収集に多くの便宜を図って頂くと共に、多くの御教示を賜った。末筆ながら御芳名を記し、感謝の意とさせていただきます。（五十音順）

秋田かな子氏 石坂 茂氏 池谷信之氏 江原 英氏 大塚真弘氏 押山雄三氏 上守秀明氏
川根正教氏 喜多圭介氏 小林清隆氏 菅谷通保氏 高柳圭一氏 中原幹彦氏 古里節夫氏
峰村 篤氏 四柳 隆氏 綿田弘美氏

末筆ではありますが、加曾利貝塚博物館の方々には本稿の発表の機会を与えていただき、心より感謝する次第であります。

註

- 1) 図版に用いる実測図の縮尺は1/10を原則としており、例外的なものは下記の通りである。
尚、千葉県内出土土器群が量的主体であるため、他都県出土土器群のみ都県名を記してある。

縮尺不明 第2図2 第16図6・7(原本未所有の為) 縮尺1/12 第2図3

- 2) 筆者の加曾利E式土器の細別呼称方法は、吉井城山貝塚の成果(岡本1963)から導き出された『日本の考古学』(岡本他1965)での呼称方法と、その後の資料的充実をもって追認された所謂埼玉編年(青木1982)に概ね準拠することとする。

尚、この場を借りて旧稿『縄文中期の諸問題』所収での誤植を訂正しておきたい。

222頁キャプション 「第1図 加曾利EⅢ式土器古新段階」→「第1図 加曾利EⅢ式土器古段階」

- 3) 旧稿aの執筆当時、当該土器群の呼称方法については、埼玉編年が研究者間へ浸透している趨勢を考慮し、埼玉編年に表記されている「波状沈線文」を用いようとしていたが、草稿を鈴木徳雄氏に校閲して頂いた際、“横位連携弧線文と呼称してはどうか”との指摘を受け、以来これに倣っている。故にこの「横位連携弧線文」なる用語の知的所有権が鈴木徳雄氏にあることを明記すると共に、ことの経緯を明らかにする事の遅れを同氏に深謝いたします。
- 4) 1本の隆帯(単浮線)による意匠描出技法のものと2本のもの(複浮線)は、型式学的には時間的差異が想定されるが、良好な状態で時間差を示す一括資料は、現在のところみられない。

大木8b式土器の変容の差異、もしくは微細な系統の差異から、当初より両技法が同時に存在する可能性も十分にあらう。

- 5) 加曾利EⅢ式段階のキャリパー形土器を瞥見すると、本来縄文部に強い懸垂文効果を有する意匠が施されるべき胴部文様施文域に、横位連携弧線文系譜の意匠が転写される例(荒砥前原遺跡 報告32頁6等)が散見され、また、第4図10・11に示したように、キャリパー形土器の口縁部文様帯に意匠充填手法を有する渦巻文が転写されている例も認められることから、第2図5・6、第4図7～9についても、キャリパー形土器の懸垂文構成主体の胴部施文域に、意匠充填系土器の意匠が転写されたものとの理解も為しうる。このようなことから、当該土器群については、大木8b式土器からの直接的な変容である可能性と、キャリパー形土器に散見される異系統意匠の転写でもある可能性の両者の存在を理解しなければならない。つまり、このような土器の系譜については、上記2種のいずれかである可能性と、両者が混在する可能性を将来的には見極めてゆくことが必要であらう。故に、図示した第2図5・6、第4図7～9についても、これらの識別を為し得ていない土器群であると理解して頂きたい。
- 6) 意匠充填手法萌芽段階の資料として第2図3・4を図示したが、北関東を中心に分布する

「大柄渦巻文を持つ樽形土器」（谷井1991）にも、意匠充填手法萌芽段階の好例が多く、地文の差異こそあれ、看過し得ない。

- 7) 加曾利EⅡ式土器とEⅢ式土器の沈文系の懸垂文効果を大局的に比較すると、EⅡ式土器では概ね縄文地に無文部を貫入させる（磨り消す）ことにより、無文部に強い懸垂文効果を有することとなるが、EⅢ式土器では無文部が拡大し、縄文部の上端が連結し逆U字状を呈し、懸垂文効果が縄文部へ移行することとなる。これは伝統的な磨消縄文手法の卓越の結果であると同時に、意匠充填系土器群の成立に際して為される、縄文地部に潜在する意匠の、明瞭な図形化（パネル化）とも連動するものであろう。
- 8) 無論、加曾利EⅢ式期以降、キャリパー形土器が当該期土器群の系統的構成の一翼を安定して担っていることは充分承知している。あくまでもEⅡ式期からEⅢ式期にかけてのキャリパー形土器の変遷過程のなかでの連弧文土器との強烈な接触であり、即キャリパー形土器が接触のなかで融合・収斂され、消滅してゆくとは考えられないであろう。第17図1・2は、キャリパー形土器の口縁部文様帯に連弧文風の意匠が転写されたものとして捉え得るものであり、当該期の複雑な様相を暗示している例かもしれない。
- 9) 本稿では、文様構成法に着目したところでの呼称方法を一貫して採ってきたので、入組系横位連携弧線文土器との境界がはなはだ不鮮明である。あまり適当な呼称方法ではないものの、容赦願いたい。但し、冒頭に記した通り研究史的立場や土器群の系統性の詳細な確認から、より適当な呼称方法があれば、全面的に従うつもりであることを明記しておきたい。
- 10) この呼称方法は（稲村1990）に準拠する。尚加曾利E式土器終末期の系統的認識の基本的な部分については、稲村論考が大いに参考となった。

参考文献

- 青木美代子他 1982「縄文中期土器群の再編」『研究紀要1982』(埼)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 石井 寛 1992「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』第9冊(埼)横浜市ふるさと歴史財団
- 石坂茂他 1988「加曾利E式土器に関する一考察」『群馬県の考古学』群馬県埋蔵文化財事業団
- 稲田孝司 1972「縄文式土器文様発達史・素描(上)」『考古学研究』第18巻第4号考古学研究会
- 稲村晃嗣 1990「加曾利E系列の土器群」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 岡本 勇 1963「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器(二)」『横須賀市博物館研究報告(人文科学)7』
- 岡本勇他 1965「3 関東」『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』河出書房新社
- 加納 実 1989「2. 縄文時代」『小中台(2)遺跡・新堀込遺跡・馬場遺跡』千葉県文化財センター
- 加納 実 1989「千葉県における加曾利E式土器後半の様相」『縄文中期の諸問題』群馬県考古学研究所
- 笹森健一 1976『志久遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書第31集
- 笹森健一 1977『前畠・島之上・出口・芝山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第12集

笹森健一 1989『上手遺跡発掘調査報告書』北本市上手遺跡調査会

鈴木徳雄 1991「称名寺式の変化と文様帯の系統」『土曜考古』第16号

谷井 彪 1991「島之上遺跡出土大木式系土器の周辺」『調査研究報告』第四号

埼玉県立さきたま資料館

丹羽 茂 1981「大木式土器」『縄文文化の研究4』雄山閣

図版引用文献

千代田遺跡 四街道千代田遺跡調査会1972『千代田遺跡』

すすき山遺跡 後藤和民・庄司 克1972「千葉市源町 すすき山遺跡発掘調査概報」

『貝塚博物館紀要』第5号千葉市加曽利貝塚博物館

花影遺跡 埼玉県教育委員会1974『関越自動車道関係 埋蔵文化財発掘調査報告』Ⅰ

生谷堤堀遺跡 佐倉市教育委員会1974『飯重』

金楠台遺跡 鉾千葉県都市公社1974『松戸市金楠台遺跡』

中野僧御堂遺跡 鉾千葉県文化財センター1976『千葉市中野僧御堂遺跡』

加曽利南貝塚 中央公論美術出版1976『加曽利南貝塚』

中道遺跡 山形県教育委員会1977『主要道発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第9集 丹羽 茂1981「大木式土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣

中野木新山遺跡 中野木新山遺跡調査団1977『中野木新山遺跡』

片野遺跡 小川和博・工藤信一・柿沼修平1977「千葉県佐原市片野遺跡発掘調査報告」『霞ヶ浦文化』3号 霞ヶ浦文化研究会

築地台貝塚 鉾千葉県文化財センター1978『千葉市築地台貝塚・平山古墳』

荒屋敷貝塚 鉾千葉県文化財センター1978『千葉市荒屋敷貝塚』

子と清水貝塚 松戸市教育委員会1978『子と清水貝塚』遺物図版編1

松戸市教育委員会1985『子と清水貝塚』遺物図版編2

中里遺跡 日本窯業史研究所1979『市ヶ尾・川和地区内遺跡群』

江原台遺跡 江原台第1遺跡発掘調査団1979『江原台』

鉾千葉県文化財センター1980『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

土宇遺跡 日本文化財研究所1979『土宇』

新山遺跡 東久留米市教育委員会1981『新山遺跡』

清里陣場遺跡 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団1981『清里・陣場遺跡』

後貝塚 小西ゆみ1981「船橋市後貝塚発見の土器」『史館』第13号 史館同人

砂川遺跡 鉾茨城県教育財団1982『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』4

竜角寺ニュータウン遺跡群 No.4 地点 竜角寺ニュータウン遺跡調査会1982

『竜角寺ニュータウン遺跡群』

中野木台遺跡 船橋市教育委員会1982『中野木台遺跡』

小金沢貝塚 勸千葉県文化財センター1982『千葉東南部ニュータウン 10』

将監塚遺跡 埼玉県埋蔵文化財調査事業団1983『将監塚－縄文時代－』

小池麻生遺跡 勸千葉県文化財センター1983『主要地方道成田松尾線Ⅰ』

餅ヶ崎遺跡 横田正美1983「柄鏡形住居址とその遺物について」

『貝塚博物館紀要』第9号 千葉市立加曽利貝塚博物館

坂之台遺跡 松戸市教育委員会1983『坂之台遺跡・東平賀遺跡第3次調査』

芳賀輪遺跡 千葉市教育委員会1984『千葉市芳賀輪遺跡』第2・7次発掘調査概報

勸千葉市文化財調査協会1988『千葉市芳賀輪遺跡』昭和61年度発掘調査報告書

南三島遺跡

1.2区(下) 勸茨城県教育財団1984『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書』10

6.7区 勸茨城県教育財団1985『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書』11

5区 勸茨城県教育財団1986『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書』12

3.4区(Ⅰ) 勸茨城県教育財団1987『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書』16

曾谷貝塚第7地点 市川市教育委員会1984『昭和58年度 埋蔵文化財発掘調査報告』

広ヶ作遺跡 千葉市遺跡調査会1984『広ヶ作遺跡』

一の谷西貝塚 一の谷西遺跡調査会1984『一の谷西貝塚』

荒砥二之堰遺跡 勸群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥二之堰遺跡』

見立大久保遺跡 赤城村教育委員会1985『見立溜井遺跡 見立大久保遺跡』

荒砥前原遺跡 群馬県教育委員会1985『荒砥前原遺跡 赤石城址』

大膳野北遺跡 勸千葉県文化財センター1985『千葉東南部ニュータウン 16』

生原・善龍寺前遺跡 群馬県箕郷町教育委員会1986『生原・善龍寺前遺跡』

草刈遺跡 勸千葉県文化財センター1986『草刈遺跡(B区)』

中薙遺跡 勸千葉県文化財センター1986『千葉市中薙遺跡』

新山台遺跡 勸千葉県文化財センター1986『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』

大栄地区(2)

小中台遺跡 勸千葉県文化財センター1987『千葉市小中台遺跡』

中台貝塚 勸千葉県文化財センター1987『主要地方道成田松尾線Ⅴ』

深名瀬島遺跡 日本考古学研究所1987『深名瀬島遺跡調査報告書』

神々廻宮前遺跡B地点 𨳊印旛郡市文化財センター1988

『船橋カントリー倶楽部造成地内埋蔵文化財調査報告書』

善谷1丁目259番地所在遺跡

市川市教育委員会1988『昭和62年度市川東部遺跡群発掘調査報告』

龍角寺遺跡 𨳊千葉県文化財センター1988『栄町龍角寺確認調査報告書』

古井戸遺跡 埼玉県埋蔵文化財調査事業団1989『古井戸－縄文時代－』

奥原遺跡 奥原遺跡発掘調査会1989『奥原遺跡』

上手遺跡 北本市上手遺跡調査会1989『上手遺跡発掘調査報告書』

小中台(2)遺跡 𨳊千葉県文化財センター1989『小中台(2)遺跡・新堀込遺跡・馬場遺跡』

林台遺跡 柏市教育委員会1989『林台遺跡』

長田雉子ヶ原遺跡・長田香花田遺跡 𨳊印旛郡市文化財センター1989

『長田雉子ヶ原遺跡長田香花田遺跡』

西原大塚遺跡・大蔵遺跡 横浜市埋蔵文化財センター1990『調査研究集録』第7冊

根之神台遺跡 𨳊千葉県文化財センター1990『北総開発鉄道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』

吉原三王遺跡 𨳊千葉県文化財センター1990『佐原市吉原三王遺跡』

囲護台遺跡 𨳊印旛郡市文化財センター1990『囲護台遺跡発掘調査報告書』

成田市教育委員会1990『成田市都市計画事業成田駅西口土地区画整理事業地
内埋蔵文化財発掘調査報告書』

今泉遺跡 𨳊長生郡市文化財センター1990『岩川・今泉遺跡』

園生貝塚 千葉市教育委員会1990『埋蔵文化財調査(園生貝塚)報告書』

神田山1遺跡・神田山2遺跡・内野第2遺跡 𨳊長生郡市文化財センター1990

『桂遺跡群発掘報告書』

東長山野遺跡 北長山野遺跡調査会1990『東・北長山野遺跡』

双賀辺田No.2遺跡 鎌ヶ谷市教育委員会1991『平成2年度 鎌ヶ谷市内遺跡発掘調査概報』

多田遺跡 𨳊千葉県文化財センター1992『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書』Ⅶ

指扇下戸遺跡 大宮市遺跡調査会1992『指扇下戸遺跡』

鎌取遺跡 𨳊千葉県文化財センター1993『千葉東南部ニュータウン』18